



ザンビアにおける複式指導法マニュアル

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 和子 メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9920

ザンビアにおける複式指導法マニュアル

大津 和子
(北海道教育大学札幌校)

Multigrade Teaching Manual in Zambia

Kazuko OTSU

はじめに

複式指導は、世界の小学校で広く行われている。とりわけ、開発途上国の人口の希薄な地域では、複式か単式かという選択肢よりも、複式かあるいは学校をつくらないうか（学校をつくるならとりあえず複式学級）という選択肢の方が現実的である。現に、「すべての子どもに教育を」(Education for All: EFA)の実現をめざして、多くの複式学級がつけられ、就学率の向上に寄与している。

近年、教育の質の向上が重要視されるようになり、教員研修や教育環境の整備に力が注がれるようになってきたが、教員研修は一般的に単式学級での指導を前提として実施され、教科書も指導書も単式指導を前提として書かれている。単式指導よりも準備や労力が必要とされる複式指導に関する教員研修は、複式学級の教育の質を高めるために必要であるが、開発途上国ではそこまで手が回らないのが現状である。

そうしたなかでザンビアは、サブサハラ地域では早くから複式指導に取り組んできた。1984年にスウェーデン政府の協力のもとに、マルコム・モファット (Malcom Mofat) 教員養成大学が4つの学校で複式学級のパイロット・プロジェクトを開始した。1989年にはザンビア大学ルングワングワ (G. Lungwangwa) 教授が教員養成大学とともに、4つの学校でパイロット・プロジェクトの形成評価を行った。彼は、プロジェクトの成果を次のように報告している。

- ・パイロット4校のすべてにおいて、就学率が増加した。
- ・就学率が増加したために複式学級が単式学級になった。
- ・校区における人口の安定が子どもの就学を安定させた。
- ・生徒の学業成績が上昇した。
- ・女子生徒の参加度が高まり、成績も向上した。

- ・保護者にとって子どもの教育費の負担が減少した。
- ・子どもたちにとって通学時間が短縮された。
- ・週日の寄宿生が増加した。

2002年にはノルウェー政府の協力を得て、南部州のリビングストーン (Livingstone) 郡とカズングラ (Kazungula) 郡で複式指導のパイロット・プロジェクトを開始、2002年4月に1人の校長と、各郡の教育行政官が、マルコム・モファット教員養成大学とリビングストーン教員養成大学の学長とともに、ノルウェーに複式指導のための研修旅行に出かけた。2003年以降、4つのパイロット校の校長、郡教育行政官、チャールス・ルワンガ (Charles Luwanga) 教員養成大学およびマルコム・モファット教員養成大学の教員、教育省教員研修部門の教育行政官がノルウェー研修旅行とプロジェクトに参加した。さらに5つの郡の教育関係者がノルウェーへの研修旅行に参加し、その後、教師及び校長に対する複式指導の教員研修が始められた。

本マニュアルはこうした経過を経て、教育省によって作成されたものである。本稿は、筆者が複式学級に関する調査のために2008年マルコム・モファット教員養成大学を訪問した際に入手した本マニュアルのドラフトを、「6 複式指導の評価」を除いて日本語訳したものである。

ザンビアにおける複式指導法マニュアル
Multigrade Teaching Manual
Teacher Education Department
Ministry of Education

本マニュアルは、教師が何も疑問を抱かずに実践すべきハンドブックではない。教師自身が目の前の複式学級の状況を観察した上で、本書の内容を理解し、解釈しなければならない。複式指導が究極の解決法というわけで

はなく、ザンビアの基礎教育を拡充するという政府の目標を達成するために考えられる多くの優れた方法の1つにすぎない。

本マニュアルの目的は次の通りである。

- * 複式指導を実践しなければならない教師のためのガイドブックとして、複式指導のアイデアを提供し、複式指導についてより深く考えることを促す。
- * 教育改革における新しい今日的な潮流を踏まえて、個人レベルやグループレベルでの教員研修、あるいは政府の実施する現職教員研修のテキストとして活用する。
- * 複式指導法を現職教師に指導する指導者のテキストとして活用する。
- * 複式指導を通じて質の高い教育を実現するために、教育政策を実施する。
- * 教育評価についての明確な理解と評価の基本を、教育政策立案者に提供する。

目次

- 1 複式指導とは
- 2 学習理論と複式指導
- 3 さまざまな複式指導／学習方法
- 4 グループ分けと学級運営
- 5 指導計画
- 6 複式指導の評価（省略）

1.0 複式指導（Multigrade Teaching）とは

1.1 はじめに

教育は、自己実現および社会の発展のために、個人としての成長を可能にするものであり、すべての子どもに

保障されている権利である。ザンビアにおけるすべての子どもたちは、都市部あるいは農村部にかかわらず、教育の権利が認められるべきである。すべての子どもたちが等しく教育を受ける権利を享受できるように、資源を公平に配分することが課題である。このマニュアルを活用することによって、教師は一般的な状況および特別な教育ニーズに応えるために、適切な教授法を選び実践できるようになるだろう。

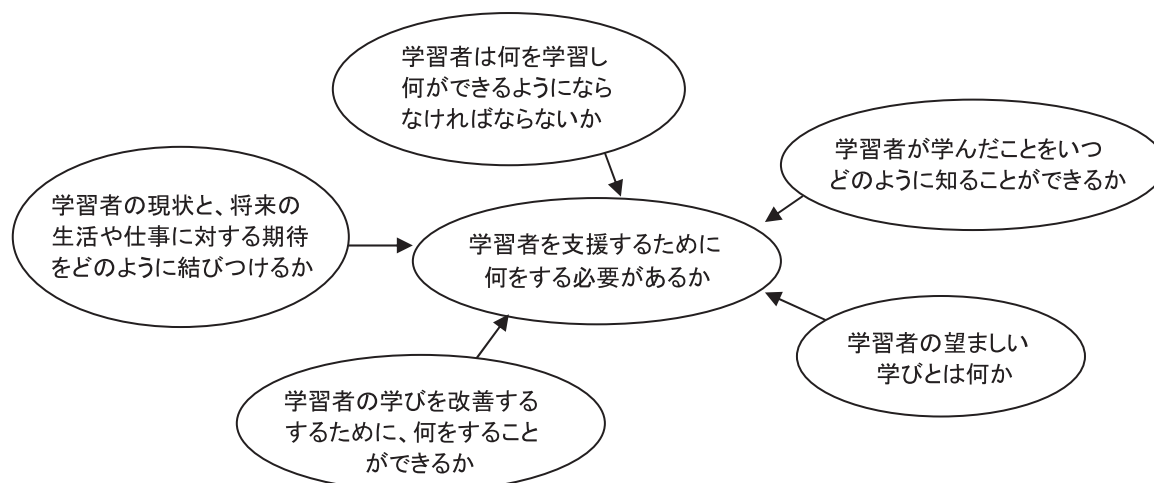
ザンビアの教育システムは、すべての基礎学校における到達目標重視（outcome based）の教育を目指してきた。このことは、遂行重視（performance based）の教育に対して、カリキュラムの総合的な見直しを促すことになった。この到達目標重視の教育は次のような前提に基づいている。

- ・すべての子どもは高い水準において学ぶことができる。
- ・すべての子どもは、さまざまなコンテキストで学んだ重要な事柄を発表することができる。
- ・教師は授業をはじめの前に、子どもたちの能力を評価する基準を、明確に述べるべきではない。
- ・学習者は、授業で学んだ事をどのように評価されるのか、どのようなことが期待されているのかを、授業の開始時に知らなければならない。
- ・学校での勉強が実際の生活と関連づけられ、行動に生かされなければならない。

これらの前提を実現するために、カリキュラムは次のような点を考慮しなければならない。

到達目標重視の教育を達成するために、学習者はすでに彼ら自身の経験を有しているということを認識する必要がある。教師が知識を注ぎこもうとする容器は、空

図1 カリキュラムで考慮すべき点



ばではない。複式指導は、新カリキュラムから切り離された新しいものとして扱うべきではなく、新カリキュラムの一部として扱うべきである。

新カリキュラムは遂行重視型から到達目標重視アプローチに移行した。到達目標とは、学習者が習得した知識、一般のおよび特定の技能、態度、価値である。

1.2 本章の到達目標 (Specific Outcomes)

この章の到達目標は次の通りである。

- ・複式概念を説明することができる。
- ・複式指導の歴史的背景を述べることができる。
- ・複式指導と単式指導を区別することができる。
- ・複式指導の課題を理解することができる。

1.3 複式指導とは何か

(What is multigrade teaching?)

複式指導とは何かを考える前に、複式の意味を考えてみよう。複式とは、1人の教師が同時に2つ以上の学年を教える方法であり、1人の教師が1つの学年を教える単式指導とは対照的である。複式指導には、次のような種類がある。

- ・クラスを分割して教える。
- ・2つの学年を同時に教える。
- ・異なるレベルの子どもたちを同時に教える。
- ・異なるプログラムを同時に教える。
- ・ある分野で垂直的に能力の異なる子どもたちを同時に教える。
- ・年齢の異なる子どもたちを教える。

ザンビアにおける複式指導の概念は、1人の教師が2つまたはそれ以上の学年の子どもたちを同時に教える指導法であると理解されている。複式学級における子どもたちは、学年が異なっているだけでなく、年齢も能力も異なっている。

複式指導は、必要モデル (necessity model) あるいはデザインモデル (design model) として組織される。必要モデルにおいては、年齢の異なる子どもたちのグループが、1つの教室で、1人の教師によって教えられる。これは財政不足、教師の不足、教材の不足などによる。このタイプの複式学級は、人口の希薄な農村地域、あるいは、生徒数が多く、教師数の少ない地域においてよく見られる。

デザインモデルの複式指導は、個々の学習者のニーズを満たすために行われる。このモデルでは、子どもたちにとって、もっとも刺激的で最大の効果が得られるように、年齢を越えてグループが編成される。

複式指導／学習過程においては、子どもたちが達成すべき到達目標を生み出す活動を明確に示しながら、能力の異なるグループを教える授業計画を立てる。

表1 ザンビアにおける複式指導と単式指導の比較

複式指導	単式指導
子どもたちの学年および能力が異なる	子どもたちの年齢はほとんど同じであるが、能力は異なる
子どもたちの年齢幅が大きい。ときに4-8歳	子どもたちの年齢差は小さく、多くの場合1歳から3歳
子どもたちは能力に応じて教えられる	一般的に子どもの能力差には重点を置かない一斉指導
学年の異なる個々の子どもたちに合わせて幅広い教授法が用いられる	主に一斉指導、時には個別指導

複式指導は、さまざまな状況やニーズのもとで、さまざまな理由から、開発途上国および先進工業国の両方で行われている。

1.4 複式指導の目的は何か

(What is the purpose of multigrade teaching?)

国家教育政策の根幹をなす Educating Our Future (1996) には、複式指導について次のように記されている。

- ・すべての子どもたちに、教育の機会を提供する。
- ・国内のすべての地域において等しく教育を提供する。
- ・質の高い教育を提供する。

複式指導を通じて、政府は以下の項目の達成を目指している。

- 1 すべての子どもたちに基礎教育を提供する。
- 2 国内のすべての地域において等しく教育を提供する。
- 3 質の高い、かつ生活に関連した教育を提供する。
- 4 もっとも経済的な方法で教育を提供する。たとえば単級学校では、1人の教師が1学年から4学年を教える。
- 5 学校をコミュニティに近づける。
- 6 適切な教授方法を採用する。
- 7 指導と学習の質を改善する。

いくつかの事例では、複式指導が退学率や落第率を低下させている。

事例1 (Case study)

カニエンバ (Kanyemba) 校は、ザンビアの大きな川の近くに位置している。近くには動物公園 (game park) もある。学校は、県の教育事務所から80キロ離れている。

生徒数80名に対して、教師が2名である。校長は教員の資格を有しているが、もう1人の教員である校長の妻は資格を持っていない。学校には地元の煉瓦で作られた教室が2つある。1年生から7年生までの子どもたちが就学しており、校長が5-7年生を担当し、妻が1-4年生を担当している。

村から小さなカヌーをこいで学校にやってくる生徒や、6-10キロの遠距離を歩いて通学する生徒もいる。雨期になると、川が洪水を引き起こし、多くの子どもたちが通学できなくなる。川にはワニが生息している。そのため、2月から3月まで学校が閉鎖される。その結果、授業時数が減少し、生徒たちの成績も低下する。貧しいコミュニティには、PTAを通じて学校を支援する余裕はない。

次の質問に答えなさい。

- 1 もしあなたがこの学校の教師であれば、どのような方法で効果的に授業を行いますか。
- 2 この状況のもとで、あなたが直面すると予想される問題をあげなさい。
- 3 生徒の就学率を低下させている原因は何だと思えますか。

次のような解答が考えられるだろう。

- 1 2人の教師が同じ教室で、異なるテーマを設定して授業を行う。
- 2 子どもたちの学年、年齢や能力に応じて、教える単元の内容や情報を準備する。個々の子どもたちのニーズや能力に合うようにグループに分け、さまざまな指導方法を活用する。が、さまざまなレベルの子どもたちにあった教材を準備することは難しいだろう。生徒たちはしばしば欠席し、出席していても疲れていたり空腹であれば、学習することは難しいだろう。
- 3 就学率は、その学校の周辺の人口密度による。学校が遠ければ、子どもたちは学校に通うことはできない。漁業・牧畜・農業などに起因する人々の移動により、地域の人口は変動する。

1.5 ザンビアにおける複式指導の歴史的背景

(Historical background of multigrade teaching in Zambia)

すべての子どもたちに基礎教育を提供するための政策は、1977年以前に始まったが、1984時点では、すべての子どもたちが9年間の基礎教育を受けるという目標は達成されなかった。現在の教育政策も、特に農村地域においては、この目標を重視している。

前出の Educating Our Future には、次のような課題

に直面していると述べられている。

- ・学校設備の充足
- ・脆弱な立場にある子どもたちや地域の学校からの要求の喚起
- ・さまざまな理由で学校に来ることのできない、あるいは学校に来ない子どもたちに対する支援。人口の希薄な農村では、7学年までの学校がない。この問題に対して、複式指導は1つの解決策である。

こうした課題に対して、ザンビア政府は1982年にスウェーデン政府の協力を得て、ストックホルム大学のフェイガーリンド (Fagerlind) 教授を招いた。彼は、ザンビアでどのようにすれば効果的にすべての子どもに基礎教育を提供することができるのかを調査し、次の点を明らかにした。

ザンビアの農村部では、学年が7学年まで揃っていない不完全な学校が多く存在するが、主な要因は以下の通りである。

- ・子どもの人口が少ない。
- ・教員数が不足しており、資格のない教師やボランティア教師に依存している。
- ・人口が希薄なために、政府は農村部の学校に7学年まで設置していない。

フェイガーリンド (Fagerlind) 教授は、こうした農村地域で複式学級を活用することを提言した。彼の提言が受け入れられ、パイロット・プロジェクトがセレンジェ (Serenje) のマルコム・モファット (Malcom Mofat) 教員養成大学で開始された。

パイロット・プロジェクトにおいて、教員養成大学は以下のことを実施した。

- ・教員研修のための教材を開発した。
- ・教師に対する複式指導法の研修を実施した。
- ・教員養成大学のカリキュラムに複式指導を位置付けた。
- ・複式指導の4つのオプション (アプローチ) を開発した。(これらについては、第3章を参照)

- 1 共通の時間割
- 2 科目ずらし
- 3 科目別グループ
- 4 総合的学習

1984年に教員養成大学は、ムクシ県 (Mkushi District) の4つの学校 (Kalombe, Katetaula, Liteta, Mwape) の教師に複式指導の研修を行い、1985年に上記の4つのアプローチを活用して、パイロット・プロジェクトを開始した。

1989年に、ザンビア大学ルングワングワ (G. Lungwangwa) 教授が教員養成大学とともに、4つの学校でプロジェクトの形成評価を行った。彼は、プロジェクト

の成果を次のように報告した。

- ・パイロット4校のすべてにおいて就学率が増加した。
- ・就学率が増加したために複式学級が単式学級になった。
- ・校区における人口の安定が子どもの就学を安定させた。
- ・生徒の学業成績が上昇した。
- ・女子生徒の参加度が高まり、成績も向上した。
- ・保護者にとって子どもの教育費の負担が減少した。
- ・子どもたちにとって通学時間が短縮された。
- ・週日の寄宿生が増加した。

マルコム・モファット教員養成大学では、複式指導がカリキュラムの一部になったために、以後も複式指導法を学生たちに教授し続けた。教員養成大学の教員が、附属学校における教育実習を監督指導することがプログラムに組み込まれた。1999年には、教員養成大学は九つの複式指導の研修モジュールを開発したが、それらはこのマニュアルに生かされている。

2000年にザンビア教育省とノルウェー教育省が、複式指導のパイロット・プロジェクトの準備を始めた。そして、2001年6月26日に両大学間で協定が締結された。地方分権化が教育改革の重要な一部であったため、プロジェクトは、南部州のリビングストーン (Livingstone) とカズングラ郡 (Kazungla District) で開始された。2002年4月、1人の校長と、各郡の教育行政官が、マルコム・モファット教員養成大学とリビングストーン教員養成大学の学長とともに、ノルウェーに複式指導のための研修旅行に出かけた。

2003年に複式指導が教員養成大学で教えられるようになったのは、到達目標重視のカリキュラムに適合するように、新しい指導方法を含める必要があったからである。学習理論および教授法にかかわる研究によると、教師の役割はファシリテーターにとってかわられ、学習者は自己の学習に責任を持たなければならない。2003年以降、4つのパイロット校の校長、郡教育行政官、チャールス・ルワンガ教員養成大学およびマルコム・モファット教員養成大学の教員、教育省教員研修部門 (TED) が研修旅行とプロジェクトに参加した。さらに、グェンベ (Gwembe)、イテチテチ (Itechi-techi)、モンゼ (Monze) 郡の教育関係者がノルウェーへの研修旅行に参加して、複式指導を導入し、2、3カ月後に教師及び校長に対する教員研修を始めた。これら5つの郡の経験は、このマニュアルに含まれている。

1.6 他国における複式指導の活用

(Use of multigrade teaching in other countries)

複式学校は、正規の基礎教育が十分に普及していない

地域において有効である。こうした地域は、しばしば物理的にも社会的にも孤立しており、したがって、学校へのアクセスが極めて限られている。たとえ学校があったとしても、カリキュラムが、その地域の生活に関連していない場合がある。複式学校は、こうした地域で就学率を高めるとともに、生活に関連した教育を提供することができる。

複式学校は、例えばベトナムでは山岳地帯の学校のない地域に見られる。こうした地域で就学率が高まることにより、より多くの女子生徒が通学できるようになる。最も近い学校でさえも遠距離通学になる地域では、保護者は娘を学校に通わせない。が、地域内に小さな学校があれば、保護者は娘たちを学校に通わせようとする。これはベトナムの事例であるが、ブルキナファソでも、同じ理由で複式学校が設置されている。

カリキュラムや教材が都市部で作られている国では、授業内容は、地方の農村部での生活にはほとんど関連していない、そればかりか、学年ごとに区切られた教科内容は、通常の学校においてさえ、子どもたちが収穫期などの手伝いのために学校に來れない子どもたちにとっては、難しい。そのため、保護者は子どもを学校に通わせようとしなくなる。複式学校は、子どもたちの生活に関連した教育を行うことにより、退学率を低下させることができる。たとえば、ベトナムでは、登校日数を減らすことができるように、複式学級で教える内容を少なくしている。

南部アフリカでは、サン族が正規の教育から周辺化されないための1つの手段として、複式学級が推奨されている。複式学級は、寄宿学校への依存を減少させるだけではなく、少数民族の文化をより保つことができるという理由による。学校がフォーマルでない方がより家庭的な雰囲気になり、サン族の子どもにとって学校に通う際のトラウマが少なくなると言われている。

複式指導は、国家のニーズおよび就学率の低い地域のニーズにもとづくさまざまな理由で実施されている。

1.7 複式指導の利点と課題

(Benefits and challenges of multigrade teaching)

1.7.1 複式指導の利点 (Benefits)

複式指導は、通常の教育を受けることのできない環境にいる子どもたちに、教育を受ける機会を提供しうる。複式指導は、コミュニティのより近くに学校を出現させる。複式指導によって教師不足の問題を軽減できる。学習者の参加と識字のレベルが高まり、その結果退学率が低下する。

複式は、学校周辺のコミュニティを支援することができる。たとえばルアノ谷 (Luano Valley) のカテタウラ

(Katetaula)校では、1985年には生徒は1年生7名であったが、1986年には55名の生徒が1年生に登録した。複式を通じて、教育の機会が得られるということで、学校の周りに多くの人々が集まり住むようになった。その結果、以前よりも多くの社会設備が政府によって整備されるようになった。

複式は、子どもたちの社会化を促す。複式学級では、子どもたちが恒常的に互いに学び合うからである。このことは、コミュニティでの生活についても言える。子どもたちは、学校の成績レベルにより分断されて暮らすべきではない。

複式は、1校当たりの教員や、教室の建設を考える上経済的である。

複式では同じ教員が、同じ子どもたちを何年も連続して教えるので、教員は子どもたちの弱さと強さをよく知り、子どもたちに合った学習活動や教授方法を採用することができる。

複式は、子どもたちの自主的な学びを促進する現代的な指導／学習アプローチと一致しており、子どもたちの自尊心を高める。

1.7.2 複式指導の課題 (Challenges)

1.7.2.1 複式教授法に対する信頼の欠如

(Lack of faith in multigrade pedagogy)

多くの教師が、1つの学年で学級を組織することを正常な方法だと見なしている。したがって、複式指導の利点を、教師や教育にかかわる人々が理解することが必要である。コロンビアでは、複式の研修プログラムに参加した教師が、他の人々に口伝えて複式の良さを知らせた。複式のプログラムは、個々ばらばらではなく系統的に実施されるべきであり、すべての関係者が複式教授法導入の合理性を理解すべきである。

1.7.2.2 社会的かつ業務上の孤立化

(Professional and social isolation)

複式教育はしばしばへき地で実施されている。教師は複式指導の難しさに直面するだけでなく、教材の不足、教育行政官による監督指導の少なさ、そして劣悪な生活環境にも直面する。こうした要因は、複式指導に対する教師の抵抗感を生み、複式に対する熱意を減少させる。複式学級で教える教員を確保することは難しく、すでに採用されている教員を引き留めることも難しい。この問題に対しては、ザンビアでも取り組まれている。

1.7.2.3 複式指導は苦勞が多い

(Multigrade teaching is more demanding)

複式指導は単式指導よりも苦勞が多い、ということは

間違いない。授業計画はより難しく、クラス経営は、同時に複数のグループの子どもたちにかかわらなければならないため、複雑である。また、いくつもの授業案を書いたり、それぞれの学年のレベルに合ったテストをしなければならぬ。複式学校の校長もまた通常は授業を行うので、仕事の負担が大きい。小規模な学校の教師は大規模な学校の教師に比べて、生徒指導も含め、幅広い仕事をこなさなければならない。

1.7.2.4 オーナーシップの欠如

(Lack of ownership)

教師は、自らがかわらぬに始められた複式には協力しようとしぬ。したがって複式を始めるときには、初期の段階で教師を巻き込むことが重要である。複式に対する当事者性を生み出すためである。

1.7.2.5 必要モデルからデザインモデルへの転換

(Changing from a model of necessity to a design model)

複式学級は前述したように、必要モデルか、あるいはデザインモデルとして、設置される。ザンビアでは、財政的な理由から複式を行なうよりもむしろ、子どもたちが互いに学び合う機会を提供するためのデザインモデルとして計画されることが望ましい。

ザンビアでは、1つの学級で1人または2人の教師の指導のもとで、学年や年齢の異なる子どもたちが学ぶ必要モデルとして、複式がとらえられてきた。この必要モデルは、財政的制約、教師や教材の不足のもたらしたものである。必要モデルの複式に加えて、子どもたちに最善の学びの機会を与えるために、デザインモデルの複式をも活用することが重要である。

1.7.2.6 新カリキュラムと新しい教授方法

(New Curriculum and new methods)

多くの教師は、教育とは、上から指示を与えたり、子どもたちに知識を与えるものであるというヒエラルヒーにもとづいた学校制度やカリキュラムに慣らされており、そうした視点から、子どもたちに何をすべきか、宿題や練習問題をどのように与えるべきかを考える。新しいカリキュラムでは、子どもたちが教師の指導や指示に従う行動的なアプローチ (behavioural approach) から、子どもたちが自らの答えを見つけるために、より活動的かつ創造的になるような学習者中心の教授方法を活用したより認知的 (cognitive) かつ「状況に埋め込まれた学習」理論 (Contextual) に転換した。そのため、教師と学習者の役割が変化したのであるが、教師も学習者もそれまでの方法に慣れているため、行動を変えることは難

しいかもしれない。

より認知的な学習理論と複式指導について理解すれば、子どもたちの認知的そして非認知的な到達目標を改善することができるだろう。もし、子どもたちが自らの学習について責任があるということを教えられれば、学習過程や指導過程の組織化について、よりフレキシブルな解決方法が見つかるだろう。

1.8 結論 (Conclusion)

方法としての複式指導は、子どもたちの学業成績を向上させる可能性を有している。必要な設備が整っていないか、若い教師の少ない地方の学校では、複式指導のもたらす効果は大きい。政府の教育制度改革の重要な1つとされている複式指導は、ザンビアの多くの子どもたちに利益をもたらすであろう。

教員グループで、次の点について討議しなさい。

- 1 あなたの地域や学校で、複式指導を活用する際の基準について。
- 2 カリキュラムに基づいた到達目標および、複式指導による結果。
- 3 単式指導と複式指導の違い、および、複式指導が学習者にどのようにして最大の効果を与えうるか。
- 4 複式指導にとっての必要モデルとデザインモデルの違いについて。

2.0 学習理論と複式指導

(Learning theories and multigrade teaching)

2.1 はじめに (Introduction)

理論とは、子どもたちがどのように学ぶかを理解するための一般的な原理や考え方である。理論は、与えられた学習活動の中で用いられる最適のアプローチや方法を選択する手助けをしてくれる。本章では、複式指導と学習にかかわる理論を取り上げる。同時に、教員養成課程で学んだ理論や参考文献を思い出させるだろう。現行のカリキュラムや指導法を理解するために、いくつかの新しい理論も取り上げる。

2.2 本章の到達目標 (Specific outcomes)

この章の到達目標は次の通りである。

- ・学習理論を論じることができる。
- ・これらの学習理論を複式指導に関連づけることができる。
- ・これらの理論を現行のカリキュラムに関連づけるこ

とができる。

2.3 学習理論 (Learning theories)

学びとは何か。行動の変容か？理解か？プロセスか？あるいは何かをつくり出すことか？

学びとは何かを理解するために実施された調査によって、次の5つのカテゴリーが明らかにされた。

- 1 知識の分量を増やす学び。学びとは多くの情報や知識を得ることである。
- 2 記憶としての学び。学びとは再生産することのできる情報を蓄えることである。
- 3 学びとは必要な時に活用することのできる知識、技能、方法を獲得することである。
- 4 学びとは抽象的な事柄を明確に理解することである。学びとは個々の事柄を相互に関連付けたり、現実の世界に関連づけることである。
- 5 学びとは、異なる方法で現実を解釈したり理解することである。学びとは、知識を再解釈することによって世界を理解することである。

カテゴリー4と5は、カテゴリー1, 2, 3と異なることに気づくだろう。カテゴリー1, 2, 3は、学びを単純にとらえている。学びは学習者にとって外在的なものであり、学びはたまたま起ったり、あるいは教師によって起こされるものである。カテゴリー4と5は、学びを内的なもの、あるいは、学習者の個人的なものとしてとらえており、現実の世界を理解するために行われるものであるとする。

私たちは到達目標を達成するために学習方法を選ぶが、異なる学習環境において、ある方法が他の方法よりもなぜ効果的であるのかを理解するために、学習理論を学ぶことが重要である。私たちの置かれている学習環境において、どの方法が最も重要であるかを決定する権限を、教師はどのくらいもっているのだろうか。学習理論は、さまざまな学びの方法を説明してくれるが、それらのアプローチは多様である。

2.3.1 行動理論 (Behavioural theories)

行動理論とは何か。行動理論では、発達は他の行動を説明する同じ原理で説明される。行動理論は、人の一生を通して学び続ける能力を、特定の時期に限定することはない。行動における大きな変化は、子どもたちが反応する刺激や子どもたちの行動を引き起こす環境に起因すると考えられる。行動理論は、学習者の考えや感情など個人的な要因、および学習者と環境との相互作用を重視しない。

行動理論は、かけ算・外国語の単語の意味・国の首都

名といった単純な学びを説明する際に適していると思われる。パブロフ (Pavlov) ・スキナー (Skinner) ・ソーンダイク (Thondike) ・ワトソン (Watson) とガスリー (Guthrie) は、行動理論の歴史上の重要人物で、20世紀前半の学習心理学を席卷していた。行動主義における学びは、行動における変化および生産物においてみられる。カテゴリー 1, 2, 3 は、行動理論の視点を含んでいる。

2.3.2 認知理論 (Cognitive theories)

認知理論とは何か。子どもたちが自分自身および世界についての理解をどのように構築するか、に焦点を当てた理論である。認知理論では、理解は自動的になされるとはみなさない。子どもたちは活発に情報を求め、加工する。認知理論は、個人的要素、行動的要素、そして環境的要素の間の相互作用において発達を説明する。

認知理論は、例えば算数の問題を解いたり、テキストから推論を引き出したり、エッセイを書く、といった複雑な学習を説明するのに適している。カテゴリー 4, 5 は、認知理論の視点を含んでいる。ピアジェ (Piaget)、ブルーナー (Bruner)、ヴィゴツキー (Vigotsky) が認知理論の代表者である。社会認知理論家としては、バンデュラ (Bandura) をあげることができる。

基礎学校のカリキュラム・フレームワーク (Basic School Curriculum Framework: BSCF) は、行動理論的なアプローチから、認知的なアプローチあるいはコンテクスト重視のアプローチに移りつつある。改訂版カリキュラムによると、従来の学校カリキュラムは次のような特質をもっている。

- ・内容が相互に関連付けられておらず、分量過多で、フレキシブルではない。
- ・事実的知識を重視しすぎている。
- ・教授言語が、多くの生徒や教師にとって理解されにくい。
- ・事実の暗記や、試験に合格するための暗記に過度に偏っている。
- ・学習および教授法を改善するための継続的な評価が不十分であり、子どもをより高いレベルに引き上げることが軽視されている。

基礎学校の新カリキュラムでは、学習および教授法の改善と、子どもをより高いレベルに引き上げるために、継続的な評価の必要性が強調されている。

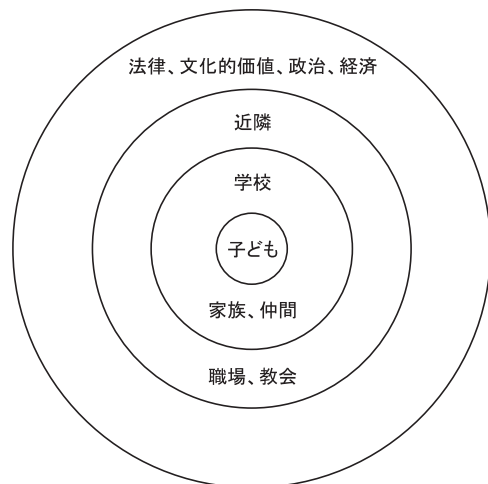
効果的な指導を行うためには、私たちが指導上取り扱う学びのタイプに最も適した理論を適用することが必要である。異なるタイプの学びの共通点と相違点を明らかにし、それぞれに効果的なアプローチを採用することが、

今後とも重要な課題である。

2.3.3 「状況に埋め込まれた学習」理論 (Contextual theories)

「状況に埋め込まれた学習」理論とは何か。「状況に埋め込まれた学習」理論とは、社会的・文化的要素を重視する理論である。この理論の根拠は、文化によって非常に異なる発達パターンを示す子どもたちの比較や、1つの社会においてさえもかなり異なる発達を示す子どもたちがいる、という研究結果に基づいている。発達において、社会的な慣行が大きな役割を果たしているということである。Bronfenbrenner (Bronfenbrenner) は、子どもは相互に係わりあう3つの輪、すなわち、学校・仲間・家族の中心に位置するというコンテクストのモデルを示した。

図2 子どもを中心とするコンテクスト



子どもたちの周囲には、近隣・拡大家族・コミュニティ・教会・職場・マスメディアなどがある。最も外側の輪には、法律、文化的価値、政治的経済的システム、社会慣習による影響が含まれる。このモデルは、あるレベルの変化が他のレベルに影響するというを示している。従って、子どもの身体的な変化は、子どもの社会集団を変化させ、また子どもの社会集団が文化的価値によって影響を受けうる。このモデルはきわめて相互作用的であり、人間の発達に及ぼす影響と、その複雑さを理解するために有益である。

認知理論および「状況に埋め込まれた学習」理論では、子どもは知識を積極的に構築する主体であり、発達とは生涯を通して継続するプロセスであるということ強調する。「状況に埋め込まれた学習」理論では、社会は変化するものであり、これらの変化が、子どもたちの仲間や、あるいは大人たちとの相互作用を変化させる、とい

うことを強調する。ヴィゴツキーやバンデューラの認知理論は、いくぶんコンテキスト重視的である。

2.3.4 複式指導に関連する学習理論

(Learning theories as they relate to multigrade teaching)

複式指導は、子どもの発達と教育に関わる多くの理論的・哲学的な理論に基づいている。子どもたちはそれぞれ異なる速度で成長し、相互に異なって成長するが、それらは子どもたちを取り巻く環境と密接に関連している。カリキュラムと指導方法が、教育哲学と矛盾することなく展開されるように、教師は複式指導の理論を理解する必要がある。複式指導は、認知理論・社会的学習理論・社会文化的理論・心理学的理論・生態学にかかわる諸理論に基づいているのである。

複式指導を採用する教授学的な根拠は、認知理論に関連している。複式学級における学びについての多様なアプローチに進む前に、次の課題に取り組みなさい。

1. 生徒たちがどのように学んでいるかについて、あなた自身の仮説を立てなさい。
2. あなたが用いる指導方法をあげ、なぜその指導法を用いるのかを説明しなさい。
3. 学ぶとはどういうことかについて考え、説明しなさい。

2.3.5 学びに関する理論的アプローチの要約

(Brief presentation of some theoretical approaches to learning)

2.3.5.1 ピアジェ (Piaget)

ピアジェは、子どもが発達するためには、彼らの環境と相互作用する機会がなければならないと主張する。このような相互作用が、知識を構築することを可能にする。学びとは、子どもたちが自身を成長させる積極的な構築者としてのダイナミックなプロセスである。ピアジェによると、認知的な発達には、生物学的成熟、物理的な環境との関わり、社会的環境との関わり、認知構造と環境の間で最適の平衡状態を生み出す生物学的衝動の4つの要因にかかわっている。

ピアジェは、子どもたちの認知的発達が固定的な道筋を超えてなされるという研究結果を示している。ピアジェの理論は、1歳半-2歳、2歳-7歳、7歳-11歳、11歳以上の4つの発達段階に分けられ、各段階は、子どもが世界をどのように見るかによって定義されている。ピアジェによると、子どもたちが内的な構造をつくったり変化させるために、認知的な対立や同化あるいは順応を経験した時に、学びが生じる。認知的な対立が最小で、とりわけ、子どもたちが2つのステージの転換期にあるときに学びが最大化される。複式学級においては、他者との相互作用の機会が多いので、生徒たちは絶えず知識を増やし、見方を広げ、それらを通じて社会的スキルを発達させる。

表2 学習理論

理論	理論家	適用
認知発達論	ピアジェ Piaget	子どもたちは行動を通して知識を構築していく
社会文化的視点	ヴィゴツキー Vygotsky	「発達の最近接領域」は発達の可能性と現実性との間の距離であり、他者との協働により促進される
認知発達論	ブルーナー Bruner	螺旋状のカリキュラムと学びの構造が教育理論の重要な鍵である
心理学的視点	エリクソン Erikson	個人として心理的社会的な課題に直面するが、うまくいくかどうかは人間関係や社会的要請に大きく左右される
社会的学習	デューイ Dewey	「なすことによって学ぶ」
社会的学習	バンデューラ Bandura	発達は観察、模倣、他者との同一化を通じた社会的な学習の産物である
エコロジカルな視点	ブロンフェンブレナー Bronfenbrenner	発達とは、子どもと社会のあらゆる側面との相互作用の結果である
被抑圧者の教育学	フレイレ Freire	学習と発達は熟考、問題提起、対話によって促進される
状況に埋め込まれた学習	レイブとウェンガー Lave and Wenger	行動基準の学習は、社会参加のプロセスとして、状況と関連づけて理解されるべきである

複式指導を行う教師は、指導内容および指導方法を生徒個人に合わせなければならないが、このことは単式学級に比べると、個人個人の認知的発達をより明確に把握することを可能にするだろう。

この学習理論を反映した指導法には、次のようなものがある。

- ・地域環境の活用 (using the local environment)
- ・協力的学習法 (cooperative learning)
- ・算数のもの教材を活用した指導法 (mathematics manipulate)
- ・プロジェクト学習 (project work)

2.3.5.2 ヴィゴツキー (Vygotsky)

ロシアの心理学者ヴィゴツキーは、期待されているとこの理解、道具 (tool)、スキル、子どもの文化による相互作用の重要性を強調する。ヴィゴツキーのいう「発達の最近接領域」(zone of proximal development: ZPD) とは、「子どもが独力で問題解決をした場合に達成される発達のレベルと、大人の指導のもとでの問題解決、あるいはより有能な仲間との協力による問題解決を通じて達成される発達のレベルの間の距離」を指す。複式学級における子どもたちは、仲間の子どもたちを助けることによって理解をより深めることができる。仲間の子どもたちはまた、多様なツールやスキル、文化的に適切な相互作用の方法を教え合うことができる。

ヴィゴツキーは、文化を伝承するための具体的なプロセスを習得し、読み書き計算のようなシンボルを通じて思考することが、心理的発達の重要な要素であると考えた。このプロセスがいったん習得されると、次のステップは、これらのシンボルを使って、思考や行動を自己統御することである。自己統御は、個人的な説話 (speech) の重要な機能である。

教師の支援とは、子どもたちの能力を超えて、課題を素早く理解できるようにする指導のプロセスである。授業においては教師が多くの作業を行い、その後、教師と生徒が行うべきことを分かち合う。生徒の能力が、より高まると、生徒自身で達成できるように、教師は支援を徐々に少なくする。

重要なことは、子どもたちが能力を高めたときに変化する「発達の最近接領域」の中で、生徒に支援をすることである。複式学級は、生徒相互間での支援の機会を提供するとともに、認知的な学習効果をもたらす言語を使う機会を提供する。ヴィゴツキー理論からの複式指導への重要な応用は、相互的な教え合い、生徒同士の協力、そして学び合うことである。

基礎学校カリキュラムは、読み書き計算の重要性を強調するとともに、読み書き計算の指導法についても強調

している。ここに、ヴィゴツキーの重視した要素を見ることができる。次の指導法は、この学習理論に基づいている。

- ・問題解決学習 (problem based/ problem solving)
- ・生徒間の教え合い学習 (peer tutoring)
- ・地域環境の活用 (using the local environment)
- ・算数におけるもの教材を活用した指導法 (mathematics manipulate)
- ・学習のプロセスを書くこと (process writing)
- ・協力的学習法 (cooperative learning)
- ・起業家的スキル (entrepreneurship) の学習
- ・プロジェクト学習 (project work)
- ・テーマ学習 (thematic teaching)

2.3.5.3 ブルーナー (Bruner)

ブルーナーは複式指導については言及していないが、彼の教育哲学は複式指導に適合する。生徒たちの学びの構造、知識を広げたり深めたりするスキルの背後にあるブルーナーの考え方は、複式指導にとっても有益である。既習事項を積み重ねていくスパイラル型のカリキュラムは、生徒たちが新しい知識を得ることを可能にし、現時点よりもさらに1歩前進することを可能にする。複式学級は、スパイラル型カリキュラムを採用するとともに、知的な好奇心や興奮を巻き起こす。

以下は、この学習理論を反映した指導方法である。

- ・生徒間の教え合い学習
- ・協力的学習法
- ・問題解決学習
- ・テーマ学習

2.3.5.4 デューイ (Dewey)

デューイ (Dewey) は、子どもたちにとって自然な学びの方法は、年長者や年齢の異なる子どもたちから学ぶことである、と述べている。デューイは、学校はコミュニティであると主張する。学校は、子どもたちが他者とともに問題に対処するために、意味のある行動をする場所であるべきである。ここでの教師の仕事は、子どもたちの「思考を促すような条件を整え」共感的な態度をとることである。教師は学習者とともに、「共通の経験」に参加する必要がある。新しい考えを学ぶ最善の方法は、他者とコミュニケーションをとることである。年齢の異なる子どもたちが互いに協力し助け合う複式学級では、プロジェクト学習や生徒間の教え合い学習、グループ学習などにおいて、「なすことによって学ぶ」ための多くの機会を提供しうる。

新しい基礎学校カリキュラムは、学習者自身が学び、成果を出す自学自習のシステムを目指している。経験学

習や実物学習、実際の行動から学ぶ学習が必要である。

この学習理論を反映した指導方法には、以下のものがある。

- ・問題解決学習
- ・生徒間教え合い学習
- ・地域環境の活用
- ・協力的学習法
- ・起業家的スキルの学習
- ・プロジェクト学習

2.3.5.5 バンデューラ (Bandura)

バンデューラは、子どもの学びの認知的な側面を、個人と環境との継続的な相互作用として説明する。観察を通じて新たな反応を付け加えながら、未来の行動のレパートリーを増やしていく。社会認知論の研究では、発達と認知スキルの獲得のファシリテーターとして、模倣や指導された行動の重要性が指摘されている。複式学級では、年少の子どもが年長の子どもを見習う機会が頻繁にある。ライフスキルや人生に対する価値観や態度を培うために、子どもたちは学習のプロセスにもっと参加して、環境や教材に働きかけるべきである。

この学習理論を反映した指導方法には、以下のものがある。

- ・協力的学習法
- ・プロジェクト学習
- ・生徒間の教え合い学習
- ・地域環境の活用
- ・テーマ学習

2.3.5.6 ブロンフェンブレナー (Bronfenbrenner)

ブロンフェンブレナーの理論は、「状況に埋め込まれた学習」理論のなかでエコロジカルな心理学として有名である。他者や環境との相互作用こそが発達の鍵であり、我々はすべて複数のタイプの環境を経験している、と彼は考える。複式学級の子どもは、家庭、級友、コミュニティ、より大きな社会によって育てられる。子どもが教室に持ち込む能力、関心、文化的価値、心情といったものはそれぞれ固有のものである。学校と家庭との連続性が、学校をより多様な世界をあらゆる環境にするであろう。

この学習理論を反映した指導方法には、以下のものがある。

- ・問題解決学習
- ・生徒間の教え合い学習
- ・地域環境の活用
- ・協力的学習法
- ・テーマ学習

2.3.5.7 フレイレ (Freire)

パウロ・フレイレは、実践から決して遊離しない哲学者および教育理論家として知られている。支配、攻撃、暴力は人間および社会生活に内在する本質である。ほんの少数の人間だけが、人種、階級、ジェンダー等の抑圧から免れることができるが、たいていの人間は抑圧の犠牲者となるか、抑圧の共犯者になる、とフレイレは論じる。人種的、性的、階級的搾取は支配と抑圧の最も顕著なかたちであるが、抑圧は宗教的信条、政治の所属、国籍、年齢、身体的・知的障害にもとづいてなされることもあると指摘する。

フレイレは、教育こそが抑圧された心理に立ち向かい、究極的に人間の存在論的な使命と考えられるものに貢献することにより、人間の状態を改善することができる、と説く。広く賞賛されている『被抑圧者の教育学』の冒頭で、「人々に対する信頼、男性および女性に対する誠実、愛することがたやすくなるであろう世界の創造」がこの書物からもたらされることを願う、と述べている。

フレイレは、実践すなわちある価値に結びついた行動についても論じている。対話は単に理解を深めるだけではなく、世界を変えることにもなる。対話は、敬意を含んだ協力的な行動である。対話のプロセスは、正義をもたらし人間を豊かにするような方法で行動するように、コミュニティを強化し、社会資本をつくることのできる点において重要である。

フレイレは、抑圧されて自ら声を発することのない人々と、昔から共に働いて来た伝統的な教育者の大きな意義に着目した。「被抑圧者の教育学」あるいは「希望の教育学」をうちたて、どのようにしてすすめていくかという思想が、重要な原動力となっている。彼の重要な関心事は、意識化（意識をたかめること）であるが、ここでいう意識とは、現実を変える力をもつととらえられている。

フレイレが、学習者自身の生きた経験からうまれる教育的な行動に注目したことは、学校教師のようなフォーマルな教育者以外の教育者に、教育のもつ可能性を指し示すことになった。例えば識字教育に携わる人々に、教育のもつ可能性や教育の新たな方法を気付かせることになったのである。

フレイレの教育学の最も顕著な特徴は「対話」と「問題提起」である。彼のいう対話とは、同等の知識をもつ両者が対等に向き合って行うまさしく双方向の対話である。教師は読み書きの知識を有し、生徒は自分たちの文化や具体的な日常生活の知識を有している。

フレイレ派の教育者は、教師の役割は、銀行に預金するように情報を生徒に一方向的に与えることとする「銀行型教育理念」を強く否定する。フレイレの教育学

は、相互に与え合い、生徒の文化を導きだしながら生徒の洞察を深めて行く相互作用のプロセスである。教師と生徒が互いに向き合い、自分たちの生活における問題を話し合う「文化サークル」が、教師が一方的に話し生徒は受動的に情報を受け取るという講義型の授業に取って代わられる。ライフスキル、価値、態度、行動様式を学ぶことの重要性は、ザンビア基礎学校のシラバスでも指摘されている。

この学習理論を反映した指導方法には、以下のものがある。

- ・問題解決学習
- ・生徒間の教え合い学習
- ・地域環境の活用
- ・物語づくり (story line)
- ・協力的学習法
- ・テーマ学習
- ・プロジェクト学習
- ・起業家的スキルの学習

2.4 結論 (Conclusion)

ザンビアにおける複式指導について言えることは何か。ザンビアの複式指導は、次の一般的な想定にもとづいている。

- ・子どもの発達に適切なカリキュラムと実践
- ・学習者中心、行動的、継続的な学習
- ・すべての子どもにたいして細かく配慮がいきとどく
- ・教師の役割はファシリテーターである
- ・科目をまたがる総合的なカリキュラム
- ・硬直した指導と評価をしない

これらの想定は、ザンビアのカリキュラムにも反映されている認知論的なアプローチにもとづいている。それゆえ、複式指導は、単式指導とまったく異なるものである、ということではない。複式指導から発展してきた、生徒同士の教え合い、問題解決学習、起業家的スキルの学習、野外学習といった指導法は多くの国で活用されている。単式指導にまったく対立すると思われる複式指導法が単式学級でも活用されているのである。

複式指導は必要モデルとして、あるいは指導上の理由から実践されるが、学習者が到達目標を達成するために効果的な複式指導法を活用することが重要である。

教師のグループで次の活動をしなさい。

- 1 学習理論を選んでほかのメンバーに説明しなさい。
- 2 その理論を、ザンビアのカリキュラムや学校に関連づけなさい。
- 3 各メンバーが学習理論を1つずつ選び、複式学級における指導に関連づけて説明しなさい。

3.0 さまざまな複式指導／学習方法 (Multigrade teaching options and teaching/learning methods)

3.1 はじめに (Introduction)

本章では、複式学級で用いられるさまざまな指導方法とオプションについて論じるとともに、複式指導に有効な方策とガイドラインについても論じる。

3.2 本章の到達目標 (Expected outcomes)

この章の到達目標は次の通りである。

- ・複式指導において用いられる4つのオプションのそれぞれについて説明できる。
- ・それぞれのオプションが効果的に用いられるのはどのような状況においてか、例をあげることができる。
- ・それぞれのオプションを効果的に応用することができる。
- ・学習方法に関連して、教師と学習者の役割の変化について論じることができる。
- ・効果的な学習方法を理解し、活用することができる。
- ・効果的な複式指導の方策とガイドラインを述べることができる。

複式指導をユニークなものにしている重要な1つの特徴は、前述したように、1つの学級に2つ以上の学年の生徒がいて、1人の教師によって同時に教えられるということである。

各学年のグループは、編成上の目的のためだけではなく、各学年に応じたシラバス内容を教えるために、能力グループとして扱われる。ここでいう能力グループとは、特定の学年の子どもたちであり、各学年に対応して教師から与えられる課題や活動を行うグループである。

このグループの中には、学習目標を早く達成する生徒、平均的な生徒、学習目標を達成するのが遅い生徒、特別な支援を必要とする生徒たちが存在する。複式教師は異なる学年、例えば、5年生と6年生と7年生、あるいは、1-4年生をそれぞれ同じ教室で、あるいは、別の教室で同時に教えなければならない場合がある。

このような状況における教師の役割は何だろうか。それは、生徒の学習プロセスを導き、支援し、相談にのることである。

3.3 複式指導のオプション

(Multigrade teaching options)

第1章で、4つのオプションを紹介したが、本章ではこれらについて詳しく論じる。

ザンビアの複式学級で活用される複式指導オプション

のうち、学習領域・テーマ・トピック・生徒の能力・学年に応じて、1つ、あるいは2つ以上のオプションを用いる。適切なオプションを選択すると、適切な指導/学習方法を採用することになる。

3.3.1 共通時間割のオプション

(Common Timetable Option: CTO)

これは、同じ学習領域あるいは同じ科目を、異なる学年の生徒に、同時に教える方法である。このオプションにおいては、学級のすべての生徒が同じ科目を勉強するが、各学年によって異なる内容を学習する。算数の授業で2つ、あるいはそれ以上の異なる学年がいる場合、各学年の内容に応じた算数を勉強する。

もし教師が、各学年に共通のトピックを見つけた場合は、上級学年の子どもが下級学年の子どもに、教えることができるようにする。重要なことは、各学年の子どもに適した課題を与えることである。共通のトピックを見つけることが難しい場合は、各学年のそれぞれに応じた課題を与える。

これが、共通時間割オプションである。例えば、1学年と2学年からなる複式学級において同じ算数を教える場合である。トピックは「集合」で、1学年の達成すべき到達目標は何かものを分けることであり、2学年の達成すべき到達目標は「集合」を説明することである。共通するテーマは「家庭」で、家庭にあるコップやスプーン、バケツ、皿などが教材として扱われる。

次の表は、共通時間割オプションを示している。

表3 共通時間割のオプション (CTO)

学年	1	2
科目	算数	算数
トピック	集合	集合

次は、共通時間割オプションのもう1つの例である。3年生と4年生からなる学級で読み書きを教える場合、トピックは「物語を読むこと」で、目ざすべき到達目標は、「物語を他の人に向けて読むことができる」である。教材として教科書を用いる。時間割は、次のようになる。

表4 共通時間割のオプション (CTO)

学年	3	4
科目	リテラシー	リテラシー
トピック	物語を読む	物語を読む

このオプションは、「社会/発達学習」(Social and Development Studies) や「語学」(Language) にも適している。以上が共通時間割オプションであるが、実際に

どのように適用することができるだろうか。

3.3.2 学習内容または科目をずらすオプション (Learning Area Staggering Option: LASO, Subject Staggering Option: SSO)

このオプションでは、同じ時間に、学年ごとに学習内容または科目をずらして教える。1つの学級に2つあるいはそれ以上の学年がある場合、各学年グループは、他のグループとは異なる内容を勉強する。教師が1つのグループに教えている場合、他のグループは、課題を与えられて自学実習をする。ここでは教師はファシリテーターの役割を果たす。

表5 学習内容または科目をずらすオプション (LASO, SSO)

学年	3	4
科目	算数	語学
トピック	足し算	母は病気だった

この場合、3年生は算数を、4年生は語学を、それぞれ勉強する。3年生のトピックは足し算であり、達成すべき到達目標は、100以下の数を数えることができること。4年生のトピックは、「母は病気である」で、達成すべき到達目標は絵を説明することができ、新しい単語を読み、練習問題を解けることである。

このオプションを使うと、3年生は自学自習のための課題を与えられ、4年生が先生と一緒に、テキストを読み、新しい単語を確かめ、練習問題を解く。両方の学年の生徒が課題をきちんとできているかどうかを、教師が確認することが重要である。

3.3.3 学習領域または科目別グループ分け (Learning Area Grouping Option: LAGO, Subject Grouping Option: SGO)

このオプションは、複式学級を構成する異なる学年に、共通のトピックやテーマをもつ学習領域あるいは科目に対して活用できる。例えば「食べ物」というトピックは「社会/発達学習」(Social and Development Studies) 「総合理科」(Integrated Studies) の両方で扱うことができる。

このオプションでは

- ・同じトピックやテーマのもとで、異なる学年が異なる学習領域を同時に勉強する。
- ・「芸術/技術学習」や「社会/発達学習」「総合理科」にはたくさんのトピックやテーマが含まれており、すべての学年に、同時に教えることができる。

このオプションを活用するにあたっては、次の点に留意する。

- ・すべての学年に共通する特定のテーマを設定する。

- ・各学年に固有の内容を、共通のトピックに付け加える。
- ・複式学級を構成している学年の数に応じて、どのトピックから始めるかを決定する。

複式学級では、低学年の生徒が学びの準備をスムーズにできるように、高学年の指導から始める。例えば、4年生と5年生からなるクラスでは、5年生の授業から始める。

複式学級を構成している各学年のシラバスに書かれた内容を教える場合には、すべての学年グループに同じ科目を同時に教えるので、単式学級と同じ時間割を使用することができる。「芸術／技術学習」におけるトピックや、すべての学年に同時に教えることのできる科目を超えたテーマを考える。

次のようなトピックが考えられる。

- ・国歌の歌い方を学ぶ。
- ・イエスの誕生と処刑。
- ・スキップの練習やゲームの遊び方を学ぶ。

(参考文献：ザンビア基礎教育1学年から7学年の教師用指導書、初等読み物、モジュール5)

〈例〉

1学年と2学年からなる複式学級の場合、最初の年は2年生のシラバスの内容を教え、翌年に1年生のシラバスの内容を教える。

表6 科目別グループオプション (SGO)

学年	1年目	2年目
1	2年生のシラバス	1年生のシラバス
2	2年生のシラバス	1年生のシラバス

複式学級に3つの学年が含まれている場合は、次のようになる。

表7 科目別グループオプション (SGO)

学年	1年目	2年目	3年目
1	3年生のシラバス	2年生のシラバス	1年生のシラバス
2	3年生のシラバス	2年生のシラバス	1年生のシラバス

複式学級を構成する各学年に、共通ではない内容をこのリストに加えた後、シラバスと共通のトピックを比較する。

複式学級を構成する学年の数、および、その教師がそのクラスを教えるであろう年数にしたがってトピックを均等に配分する。

計画にあたっては、各学年に固有の内容と、共通するトピックに留意すること。

3.3.4 総合的学習オプション

(Integrated Day Option:IDO)

このオプションでは、教師が生徒と一緒に到達目標を達成するための計画を立てる。学習者のニーズ、関心ややりたいこと、そして成果を十分に配慮することが重要である。教師の役割は、授業の全期間にわたって、学習者にとって、到達目標を念頭に置いたガイドであり、マネージャーであり、ファシリテーターであり、コンサルタントである。教師は、それぞれ異なる学習領域に関連した到達目標の達成をめざす計画の枠組みを準備し、その枠組みの中で、いつ、どのような課題を行なうかを生徒たちが選ぶ。

このオプションでは、子どもたちは、どの科目を学ぶ

表8 事例1 共通時間割オプション

	2004年と2006年	シラバス	2005年と2007年	シラバス
2年生と3年生	学習領域： 総合理科 トピック： 人間のからだ 健康、環境	29-30頁 33-34頁	学習領域： 総合理科 トピック： 環境、植物と動物 物質とエネルギー	30-32頁 34-35頁

表9 事例2 「総合理科」の科目別グループオプションと共通時間割オプション

	2004年	シラバス	2005年	シラバス
2年生と3年生	学習領域： 総合理科 トピック： 人間のからだ 健康、環境 植物と動物 物質とエネルギー	2年生： 29-32頁 3年生： 33-35頁 (注)	学習領域： 総合理科 トピック： 人間のからだ 健康、環境 植物と動物 物質とエネルギー	2年生： 29-32頁 3年生： 33-35頁 2, 3年生(注)

(注) 2, 3年生ともに科目または学習内容をずらして共通のサブトピックを学習し、2年生は3年生で内容を繰り返す

かを選ぶだけでなく、どのトピックをいつ学ぶかをも選ぶ。教師は、子どもたちと、どの科目を選ぶかを前日までに話し合い、子どもたちの興味に応じて、グループ分けをしておく。教師は、子どもたちの選んだトピックを学んで達成すべき到達目標、および子どもたちの役割と、授業時間について、知らせておく。

子どもたちは、選んだ科目について、誰にでも尋ねたり相談することができる。各グループが到達目標を達成することができたかどうかを、どの生徒が教師に報告するかを決めておく。

複式指導における総合的学習オプションは、基本的には復習や補習として位置づけられる初級読み方プログラム (Primary Reading Programme) のように取り扱われるべきである。つまり、学習者の自律的な学習として位置づけられる。教師は、厳格であるよりもむしろフレキシブルである方が良い。教師にとって、ファシリテーターとしてのあり方を考える良い機会であり、また、学習到達度の低い子どもたちが、翌週の学習に追いつくための1つの方法として活用することができる。

このオプションを活用できる他の活動や状況を考えなさい。

次のような場合に、このオプションを活用できる。

- ・異なる科目を勉強している子どもたちへの復習を準備する。
- ・就学上の困難を抱える子どもたちに、復習の課題を与える。
- ・子どもたちにテストの準備をさせる。
- ・能力の高い子どもたちに難しい課題を与える。
- ・授業参観日のための教材を準備する。
- ・プロジェクト・ワークや参観日で活用する。

3.4 指導方法 (Teaching methods)

複式指導における指導方法の選択は、常に、カリキュラム、シラバス、学校、コミュニティ、教師、保護者、生徒、環境、そして利用できる資源など、多くの条件によって影響される。とりわけ複式指導に対する保護者の期待は重要である。

いつも黒板を使って行なう授業がいい授業だろうか。どのような教授方法が効果的なのだろうか。自分の受けてきた教育をモデルとして、教育するのはいいことだろうか。どの目標を強調すべきだろうか。自身の指導方法や学びに対する考え方に、十分自覚的だろうか。

教師が指導方法を選択するとき、自身のスキルや価値観、そして、学習者にどのようなことを習得して欲しいのかを問うことが重要である。例えば、生徒同士の教え

合い、協力的な学習やプロジェクト・ワークなどにみられるように、複式の指導法と学習法は、相互に補い合うものである。

財政状況の厳しい学校では、近隣で容易に手に入っている材料を使って、より創造的な教授活動をしなければならない。周囲をよく見廻して、低価格で創造性を発揮することが求められる。そして、フレキシブルでなければならない。

3.4.1 協力的学習 (Cooperative learning)

協力的学習は、子どもたちに自学自習の姿勢を育てることができる。子どもたちが大人になってから、社会に貢献できるような技能や態度は、グループ内での合意形成や助け合いながら学ぶ協力活動によって培われる。認知的な発達と批判的思考が、学習者間の相互作用によって促進される。協力的学習が成功している複式学級では、個々人の多様性が尊重され、社会性をはぐくむことができる。ジグソーパズル法は、協力的学習の1例である。

教師が常に協力的学習方法を採用していると、子どもたちが自由に自分の意見を発表したり、他者の考え方に寛容になる。

〈学級活動〉

子どもたちがカードを使いながらグループ内で問題解決をする課題を与える。グループ内で討論をしたり、ロールプレイ、寸劇、なぞなぞ遊びなどをできるようなトピックを選ぶ。

3.4.2 テーマ学習 (Thematic learning)

テーマ学習とは、いくつもの学習領域にまたがって設定されたテーマについて学ぶ学習方法である。テーマ学習では、子どもたちは、特定のテーマに関してさまざまな学習領域で深く探究する。テーマに関連する学習領域の間の関係は明瞭でなければならない。子どもたちは読んだり、書いたり、さまざまな形でテーマについて探究する。

テーマ学習は、結果よりもプロセスを学ぶことを支援する環境をつくりだすいい機会になる。複式学級におけるテーマ学習では、すべての子どもたちが共通のテーマを分かち合いつつも、それぞれの子どもが各人の発達段階に応じて適切なテーマを学習する。

共通のテーマとして、例えば「身体」をあげることができる。「算数」では、例えば指や目の数を数えることができる。「総合理科」では、身体各部分の機能について話し合うことができる。「芸術／技術学習」(Creative and Technology Studies)では、身体をどのようにケアするかについて話し合うことができる。英語では、身体各部分の名称を学ぶことができる。

表10 異なる学習領域における「食べ物」の学習

コミュニティ学習	算数	芸術／技術学習	社会／発達学習	英語	総合理科
地域で育つ食べ物	食べ物の価格	果物や野菜の色を塗ったり繊維を織る	遠方からの食べ物	食べ物についての詩や歌	食べ物の衛生、植物の食用部分
地域のマーケットを訪問	メニューの費用を計算	根や幹で模様をつける	農業のシステム	食べ物について想像して物語をつくる	バランスのとれた食事と栄養素
地域の食べ物を教室に持ち込む		果物や野菜を描く	土壌とその種類	好きな（嫌いな）食べ物について書く	エネルギー源としての食べ物
			民族料理	メニューをデザインする	調理
			農業における気候の重要性	創造的な物語を書く	植物を育てるために必要な条件

表10は、食べ物をテーマとする4年生から6年生のテーマ学習の、各学習領域の関連を示したものである。

ザンビア教育省は、カリキュラムに関連して、少なくとも6つの異なるモジュールを開発した。モジュール4の18ページには、水供給システムをテーマとして、英語・算数・理科をどのように統合できるかを示している。この方法は、各教科でグループ学習を行うときにも活用できる。

3.4.3 生徒同士の教え合い学習

(Peer tutoring / teaching)

他の生徒を手助けすることが、生徒同士の教え合いの基礎である。クラスの生徒に幅広い能力の違いがある場合、より到達度の高い生徒が、遅れている生徒を助ける。生徒同士の教え合いはすべての生徒に有益であり、教える側の生徒の成績も伸ばすことになる。さらに仲間を教えることは、自尊心と自信を高め、よりよい社会関係を築き、より積極的な態度を養うことにもつながる。また、教えられる側の生徒は、教師よりも仲間に教えられることで、より早く理解することができる。そして、教えられる生徒は、見習うべきすぐれたロールモデルをも得ることになる。

1つの教室で異なる年齢の子どもたちを教えることは、社会的にも教育的にも利点がある。教室の生徒たちが多様である場合、教師は、子どもたちを一斉に教えるのではなく、個々の子どもたちのニーズを満たさなければならない。複式学級の年長の子どもたちにはリーダーやファシリテーターとして、年少の子どもたちには学習者としての利点がある。複式学級における社会的相互作用は、競争的ではなく、他の子どもたちの能力を理解しようとする雰囲気を生み出す。

教室に6年生と1年生がいる場合は、6年生の子どもが1年生の子どもに読み聞かせをすると、両者ともに高い学習効果を生み出す。複式学級に組織される学年がその時々によって異なり、扱うテーマも異なるが、それら

は教師が達成しようとする目標によるものである。

複式学級の教師は、テーマについて子どもたちにノートに書かせ、それをもとにして、子どもたちを同じレベルで教えるか、あるいは、異なるレベルで教えるかを判断する。また、こうすることによって、子どもたちは、仲間に何かを説明するよう求められたときに、より効果的に教え、学ぶことができる。

生徒同士の教え合い学習には、大きく次の4つの方法がある。

- ・上級学年の生徒が下級学年の生徒を教える。
 - ・より能力の高い生徒が、同じ学年の能力の低い生徒を教える。
 - ・年長の生徒が新入生の面倒を見る。
 - ・年長の生徒が、グループのリーダーとして教える。
- 教える生徒は具体的に次のようなことを行う。
- ・年長の子どもが年少の子どもに本を読み、読み方を教える。
 - ・年長の子どもが、年少の子どもに、算数の問題を繰り返し説明する。
 - ・年長の子どもが年少の子どもの宿題ができているかどうか点検する。
 - ・調べ学習のときに手助けする。
 - ・グループ活動やプロジェクト学習のときにリーダーとなる。
 - ・教師の説明を1回で理解できない子どもに対して、説明を繰り返してやる。

3.4.4 プロジェクト学習 (Project work)

プロジェクト学習は、トピックやテーマを学ぶときの1つの方法である。子どもたちが、個人としてあるいはグループとして、観察・インタビュー・情報収集・発表準備といった学習活動を行う。プロジェクト学習を行うときは、その地域社会の中から、テーマを選ぶことが重要である。

プロジェクト学習は、文献を読むこと、情報を集める

こと、実験を行うこと、そしてプロジェクトを企画することなどを含む。学習領域によって、プロジェクトのテーマが異なることがあるが、通常は4つのタイプのプロジェクトを組み合わせるといい。

基礎学校のカリキュラム・フレームワークには、4つの学習領域をまたがるテーマ、すなわち「健康」「環境」「共生」「生活」を扱うときに有効であると記されている。プロジェクト学習はすべての学習領域に有効であり、教師は、単純なものから複雑なものまで、異なるタイプのプロジェクト学習を行う準備をすることが求められる。

プロジェクト学習においては、子どもたちのグループや性別の状態を、テーマに反映させることができる。基礎学校のカリキュラム・フレームワークが提言しているように、上級学年の算数と理科では、女子だけのクラスを作ることも有益である。すべてのタイプのグループ学習において、能力の違いだけではなく、性別の違いも配慮することが重要である。

〈例1〉

学習領域：「社会／発達学習」

トピック：家族の木 (Family Tree)

内容：子どもたちは一緒に暮している家族の顔を書いて切り抜き、家族の木をつくる。

習得されるスキル：描く。切る。説明を聞く。発表する。

〈例2〉

学習領域：「社会／発達学習」

トピック：野生の果実からサラダを作る

スキル：地域の経験豊かな人の話を聞く。

野生の果実のある場所に行き、それらを集める。

野生の果実を割って実を取り出す。

果実の実を挽く。

果実の実を煮て、実から油を絞る。

油と、果実のほかの部分を使う。

情報を集め、果実を採集するためにグループで活動する。

〈例3〉

学習領域：「芸術／技術学習」または「コミュニティ学習」(Community Studies)

トピック：木を使って必要なものを作る

学習のプロセス：木から作られた備品や道具にどのようなものがあるかについて、ブレインストーミングをする。

地域の人の助けを借りて、それぞれの備品や道具に使われている木の名前を挙げる。

地域で入手できる木の見本を集める。

地域の人の助けを借りて、木を準備する手続きについて話し合う。

グループまたは個人で、調理道具、椅子、スプー

ンなど、何を作るかを選ぶ。

作ったものを売ったり、学校で使用する。

〈例4〉

地域に、どれだけの数の大人や子どもが生活しているかをグループで調べる。この数字をさまざまなグラフに表したり、討議のためのレポートを書くときに活用することができる。

3.4.5 地域環境の活用 (Using local environment)

校外での学習活動によって、地域を活用したカリキュラムをどのように実践しているかがわかる。地域の自然環境、産業、文化など、地域のどの側面がフィールドトリップ、訪問、キャンプなど校外でのさまざまな活動に適しているかを理解しなければならない。これは、プロジェクト学習や総合学習の一部として、あるいは、特定の教科や、前述したいくつかの指導方法の組み合わせの一部としても活用できる。

これは複式指導に非常に有効なアプローチである。「環境」と「生活」は、ザンビア教育省のカリキュラムに記されている教科をまたがるテーマであり、基礎学校のカリキュラム・フレームワークに記されている「コミュニティ学習」の中で、地域に関連したカリキュラムを実践する場合にもおおいに活用できる。

4年生の「総合理科」の授業で、土壌浸食について教える場合、学校の周辺で、水や風によって土壌が浸食された場所に生徒を連れて行くことができる。その場所は、地域社会における学習の中心的な場所となるだろう。

〈例1〉

学習領域：「総合理科」

トピック：生物と無生物

学習のプロセス：

授業を開始する前に、生徒たちに周囲の環境を観察する機会を与える。

すべての生徒に、学校の周辺の自然環境からいくつかの実物を教室に持ってくるように指示する。

それらのものをひとまとめにし、生徒にそれらを2つのグループに分けるように指示する。

グループ分けした後で、2つのグループのそれぞれの特徴を話し合い、それらが生物と無生物に分かれているかどうかを見る。

生物および、無生物の定義を生徒たちにさせる。

3.4.6 プロセスを記述する (Process writing)

プロセスの記述とは、学習の成果物に焦点を当てるよりも、プロセスで学んだ価値や得た学びについて記述することを意味する。これは、異なる能力や異なる興味を

もつ生徒たちからなる複式学級において適している。すべての子どもたちが、各人の発達段階に応じて、学びのプロセスを書くのである。後述するように、ストーリーラインは、プロセス技術の多くの方法の中の1つである。生徒たちは彼らの経験と創造力を存分に活用して、物語を作る。これらの一部は、リテラシーの授業（New Break Through Literacy: NBTL）でも行われている。

学習活動は次の通りである。

低学年の生徒が絵を描いている間、他の学年の生徒は文章を書く。たとえば主食であるシマをどのようにして準備するかについて、簡単なプロセスを書く。

3.4.7 ストーリーライン学習 (Story-line method)

ストーリーラインは、スコットランドで発展した学習方法である。ストーリーラインは、学習者が懸命に物語を作ることによって意味ある学びとなり、子どもたちの記憶にも残る。教室では、教師と生徒の役割が変化する。ストーリーラインは、カリキュラムをより統合されたものにするための、1つの有効な方法である。ストーリーラインは、活発な学びと思考をもたらし、教授と学習の効果を高める重要な方法である。さらにストーリーラインは、学習者に対して強力なオーナーシップの感覚（当事者性）をはぐくむ。

ストーリーラインは、カリキュラムを統合するために有効な方法である。ストーリーラインの重要な要素は、状況設定、人物、出来事である。教室において日々展開される物語は、カリキュラムに関連づけられる。ストーリーラインは、トピック・ウェブ学習と違って、物語を展開するための主要な発問が行われるということである。トピック・ウェブ学習では、活動はランダムに行われるが、ストーリーラインでは、先行のエピソードに基づいて、論理的に話をつなげなければならない。

ストーリーラインは、先行者の知識や経験に導かれて、学習者が行動や経験を通して自分自身にとっての意味を構成することによって成立する、という理論に基づいている。学習者が、重要で意味があると考える物語の中に積極的に関わることによって、学びが成立するのである。

子どもたちは、ストーリーライン学習法によって与えられた状況を把握し、どのような行動をとるかとともに考え、やがて世界がまさしくそのように動いている、ということを理解する。それは自己を認識する力をつけるとともに、行動する能力を育てる。

例えば、伝統的儀式を扱うテーマで絵を描き、学年のレベルに応じて、短い文章または長い文章を書く学習活動が考えられる。

3.4.8 読書活動 (Literature-based reading)

読書活動は、子どもたちに幅広い読み方を教えるための方法である。このアプローチで使われるのは、子どもたちを指導するための本ではなく、むしろ子どもたちが楽しく読むことのできる本である。複式学級における読書活動は、子どもたちのレベルに応じて読むことにより、さまざまな興味やスキルをはぐくむことができる。複式学級においては次のような活動が可能である。

- ・低学年の子どもたちが本を読み、高学年の子どもたちがそれを書く。
- ・読む力のある子どもたちが、そうでない子どもたちに読んで聞かせる。
- ・読んだ物語を子どもたち自身の言葉で、話したり書いたりする。

同じクラスまたは、別のクラスの子どもたちが書いたものも、教材として使うことができる。これらの教材は、生徒たちのレベルに合っていないなければならない。この方法はリテラシーの授業でも行われている。

3.4.9 算数のもの教材を活用した指導法 (Mathematics manipulatives)

算数の概念を理解させるために具体的なものを使ったり、生徒たちの相互的な活動を用いる方法である。たとえば子どもたちは、ボタンやブロックや豆のようなものを集め分類することによって、それらの類似性と違いを認識することができる。これは、分類の1つ手前の段階である。砂時計や写真は、子どもたちに時間の概念を理解させ、身長や体重を計ることによって、計る事の意味を理解させることができる。鋳型に流し込んでものを作ることもできる。これらのもの教材やプロセス重視の活動は、複式学級に非常に有益である。

学習活動の例；

- ・石や図形など具体的なものを使う。
- ・色や形によってものを分類する。
- ・長さや周囲や角度を計る。
- ・チェスやカードゲーム、あるいは地域でなじみのあるゲームなどを活用する。

3.4.10 問題中心学習 (Problem-oriented learning / problem-based learning: PBL)

問題中心学習は、生徒の活動を刺激し焦点づけるために問題を用いる指導方法であり、教科に関わる知識よりも、むしろ問題から出発する。その問題と関連する教材を使って、教師の支援を得ながら、その問題がどのように継続的に展開されてきたかを学ぶことを通じて、知識やスキルを習得する。

このアプローチでは、教授と学びの視点が絶えず入れ替わるので、教師と生徒のいずれが活動を方向づけるかによって方法が異なってくる。このアプローチでは、意味のあるコンテキストで学ぶことが重要であるため、現実生活における諸問題が取り上げられる。教師が最初に用いる事例や絵・テキストは、以後の学習に関連づけられる。

このアプローチには7つのステップが組み込まれており、それらは終わることのない環のようにも見える。

7つのステップとは、以下の通りである。

- 1 とりあげる問題を見つけ、仮説を立て、どのような問題があるかを考える。
- 2 問題を解決するために、まだ知らないこと、そして知るべきことを明らかにする。
- 3 学習者のニーズに優先順位をつけ、学習目標を設定し、教材の準備をする。
- 4 自学自習のための準備をする。
- 5 すべての生徒が情報を得ることができるように、グループ間で新しい知識を交換する。
- 6 得た情報を、問題を解決するために応用する。
- 7 新しく得た知識を使えるかどうかを判断し、問題解決の方法を考え、そのプロセスを振り返る。

ザンビアの教育目標の中には、分析的・革新的・創造的・建設的な精神を育てることが含まれているので、その点においてもこのアプローチは有益である。

3.4.11 問題解決学習 (Problem solving)

問題解決学習は、生活の中で解決すべき問題を明らかにし、解決策を見つける能力を育成する方法である。

この方法は、自ら問題を見つけたし、それらを自らの行動によって解決する能力を育成する。生徒たちが自ら行動する際には、困難にぶつかったり、混乱に陥ることがあるが、教師が生徒を適切に指導することが重要である。問題解決学習は、探求学習の1つの形態であり、情報を探し、加工し、現実の問題に適用するというプロセスをとる。問題は学習者にとって切実であり、学習者の興味をひくものでなければならない。問題解決学習は、子どもたちの興味を引きつけながら思考力や判断力を育て、問題解決へのより大きな責任感を子どもたちに培う。

教師は、思考力を育成するための活動を教科書や指導書からもってきたり、下記のような問題解決学習のモデルに基づいた活動を使うことができる。

- ・周辺で起こっていることについての情報を集める。
- ・解決のための考えを、ブレインストーミングを通じて生み出す。
- ・最も良い解決方法を選ぶ。
- ・解決策を他の人と話し合う。

- ・問題解決のために自分のしてきた事をチェックし、望んでいたことができたかどうかを評価する。

3.4.12 起業家的資質 (Entrepreneurship)

起業家は、現金収入を得るための活動が可能かどうか判断する目をもっており、新たに事を始めるにあたってのリスクをも考えながら、ビジネスを始める人である。成功するかどうかは、本人の起業家としての資質と、周辺の条件による。

創造性・勇気・協力・活動性・好奇心・責任感・独立心といった起業家としての資質を学校で育てることは、これから重要になるであろう。こうした起業家としての資質は、すでに教師の中にも存在し、新しい教育理論においても、その重要性が指摘されている。それは、ヴィゴツキーの学習理論や社会構築論にも含まれている。

起業家的資質、例えば、どの資源をどのように活用できるかを知っていると、新しい仕事を作り出すときや良い住宅を作ろうとするときにいっそうの能力を発揮し、地域での生活や余暇においてもより建設的で創造的な過ごし方ができるようになる。ザンビアのカリキュラム・フレームワークにおいて、起業家的スキルの習得は新しい目標の1つとされている。近年の社会開発やニーズに応じて、カリキュラム・フレームワークは次の2つの目標を付け加えた。

- 1 自営業、および起業家的資質に関連した基本的知識に対する肯定的な態度を育てる。
- 2 リプロダクティブヘルスやエイズを含む性的感染症に関連して、自己および他の人々の健康を増進する。生徒たちの起業家的資質を育てるために、問題解決を迫られるような環境を作り出す必要がある。たとえば次のような状況を子どもたちに与えることができる。教室にはガラスの壊れた窓があるが、学校にはそれを修繕するお金がない。新しい窓ガラスを買うお金を得るために、どのようなビジネスをすることができるだろうか。学習者はその地域にある可能性を見つけ、問題を解決するであろう。

〈学習活動〉：

低学年では、教師から問題を与えて、生徒が解決の方法を見つけだすようにする。ブレインストーミングをすることが、最初のステップであろう。

高学年では、責任者・会計・販売係などの役割を割り当てて、学校でビジネスを実際に行うことができる。

3.4.13 コンピューターを活用した学習 (Computer-assisted instruction)

コンピューター・プログラムを使うことによって、生徒たちは、教えられたり、練習問題を解いたり、学んだ

ことを応用することができるだろう。ただ、使用できるコンピューターの台数には制限があり、教師のコンピューター・スキルも限られている。現時点では、コンピューターを使った学習を複式学級に導入するのは時期早尚である。しかし、基礎教育のカリキュラム・フレームワークには、3年生から、コンピューターを活用するように書かれているので、コンピューターのある学校では、この学習法は有効である。算数ゲームやスペル学習などのコンピューター・プログラムも活用することができる。

以上述べてきた方法のほかに、次のような方法を活用することができる。

- ・グループ討議
- ・野外遠足
- ・ロールプレイ
- ・ケーススタディー
- ・ディベート
- ・ドラマづくり
- ・クイズ
- ・鋳型を使ったものづくり
- ・写真分析
- ・Q&A
- ・お話の読み聞かせ
- ・歌やダンス
- ・ことわざ遊び
- ・ゲーム
- ・展示

(Interactive Methodologies Manual for HIV/AIDS Prevention in Zambian Schools, pp115-119)

3.5 結論

本章では、複式指導で活用できる4つのオプションと、さまざまな指導方法について述べてきた。単に方法について説明するだけでなく、複式学級においてそれらがどのように、活用できるかを示した。教師は、複式学級で単に学習者を支援するという目的のためだけではなく、教育の質を高めるために、これらのアイデアを実践しなければならない。

- 1 次の指導方法について、2つの利点と2つの困難点をグループで議論しなさい。
 - ・科目によるグループ分け
 - ・総合的な学習
- 2 共通時間割オプションが、科目ずらしオプションとどのように異なるかを説明しなさい、
- 3 総合的な学習オプションを実践する際の、計画の重要性について説明しなさい。
- 4 科目によるグループ分けオプションを活用するのはどのような状況の時か。事例を2つあげなさい。
- 5 複式指導における相互に学び合うプロセスで、子どもたちは有益な役割を果たすことができる。子どもたちの果たす重要な2つの役割について説明しなさい。
- 6 複式学級における究極の到達目標は何だと考えますか。

4.0 グループ分けと学級運営

(Classroom organisation and management)

4.1 はじめに (Introduction)

教師が授業の準備をどれだけ周到にしているも、学級運営やグループ分けがうまくいっていないければ、効果は半減する。この章では、グループ分けと学級運営のいくつかの側面について論じる。効果的な学級運営および、子どもたちをより望ましい行動に導く有効なスキルを学ぶことができるであろう。

複式学級の教員が、優れたグループ分けをするために必要なことは何であろうか。

それは、次の2つである。

- ・互いに協力し合い、家族のような雰囲気学級を作り出すこと
- ・子どもたちを面白がらせ、刺激を与えるような学習環境を維持すること

4.2 本章の到達目標 (Expected outcomes)

この章の到達目標は次の通りである。

- ・グループ分けと学級運営について論じることができる。
- ・グループ分けのさまざまなオプションを活用することができる。
- ・指導方法と到達目標に応じて、子どもたちの座席をさまざまに変えることができる。

4.3 学級運営とは何か

(What is classroom management?)

学級運営は、学習環境を秩序あるものにするためのすべての行動、およびグループ分けの諸要因に関連し、子どもたちの学びの意欲を高める雰囲気を作り出す指導方法にも関連する。グループ分けは、教師にとって重要なスキルである。

複式学級に3つの学年の生徒がいる場合、生徒たちの学びの意欲を高める環境を作り出すために、どのようなことをしなければならないだろうか。

次のことを考えてみよう。

- ・子どもたちを学年別にグループに分ける。
 - ・指導方法や到達目標に応じて、グループに分ける。
 - ・授業の到達目標を踏まえて、どのような座席形態で座らせるべきか。
 - ・子どもたちは、どのように自己評価をすべきか
 - ・教師は、どのように学級を評価すべきか
 - ・なぜ特定の方法でグループ分けをするのか
- 複式学級の教師は、学級の構成や物理的な環境によって

異なるそれぞれの指導場面に適した学級運営を行うために、フレキシブルでなければならない。

複式学級では、教師があるグループを指導している間、残りの生徒たちが自分たちで学習ができるように、グループ分けされる。読み書き計算のようなスキルを身に付ける場合には、生徒たちは学年をまたがって能力別にグループ分けする。教師が1つのグループに教えている間、他のグループは課題を与えられて自習する。学級運営については、以下の点を考慮しなければならない。

4.3.1 学級編成の方法 (Grade grouping ways)

複式学級の運営は、学年・人数・能力・年齢など多くの要因を考慮しなければならないので難しい。子どもたちが、与えられた課題に常に効率的に取り組むことができるように、学級運営をしなければならない。したがって教師は、学級編成のいくつかの方法、および課題の与え方を修得していなければならない。

複式学級の中で、異なる学年を同じ学級にする場合、教育省によれば、40名を超えてはならない。生徒数が40名を超える場合は単式学級にするか、あるいは、2つ以上の学級に分けて、他の学年の生徒と合わせて1つの学級に編成できる。

次のような生徒数の学校で、教師が1人だけの場合、どのような学級編成をするのがいいだろうか。

表11 各学年の生徒数

学年	生徒数
1	55
2	7
3	9
4	11
5	15
6	19
計	116

次のような学級編成が考えられるだろう。

- ・1年生を単式学級とするか、あるいは、2つ以上のグループに分けて、他の学年の生徒と一緒にして1つの学級にする。(全体で6学級または5学級)

- ・1年生は、55名の単式学級、2年生・3年生・4年生は計27名で1つの複式学級をつくり、5年生と6年生は計34名で、もう1つの複式学級とする。(全体で3学級)
- ・1年生を27名と28名の学級に分け、そのうちの1つを2年生と一緒にして35名の複式学級とする。残りの1年生の生徒は3年生と一緒に、36名の複式学級とする。4年生・5年生・6年生は、計45名の複式学級とする。(全体で3学級)
- ・1年生を18名・18名・19名の三つのグループに分け、それらを1つずつ2年生・3年生・4年生と一緒にして複式学級とし、5年生と6年生と一緒にして、4つ目の複式学級とする。(全体で4学級)

こうした学級編成は、教師の人数や教室の数によって決定される。(たとえば1番目のオプションの場合、少なくとも2人の教師と2つの教室が必要となる。)

学級編成は、必ずしも厳密に、たとえば1年生と2年生、あるいは2年生と3年生というふうに、学年の順番にこだわる必要はない。1年生と4年生、1年生と3年生、1・3・4年生と5年生、あるいは、1年生と3年生と6年生、あるいは、全学年を1つに学級編成することもできる。

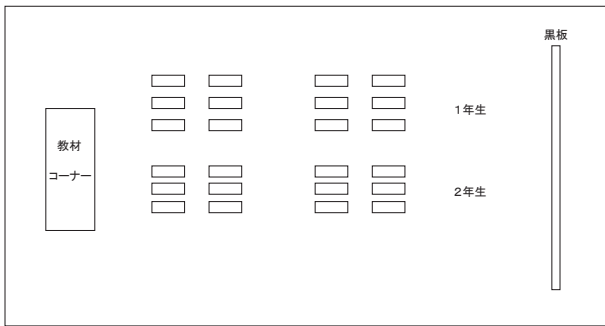
学級編成をする場合に最も重要なことは、学習者が効果的に学ぶために、どの方法が最も適しているかということである。各グループの生徒の人数を考慮するだけでは、十分ではない。

4.3.2 グループ分け (Classroom organisation)

複式学級におけるグループ分けは、単式学級におけるよりも注意を必要とする。ここでは、どのようにグループ分けをすべきか、いくつかの例を取り上げて見てみよう。

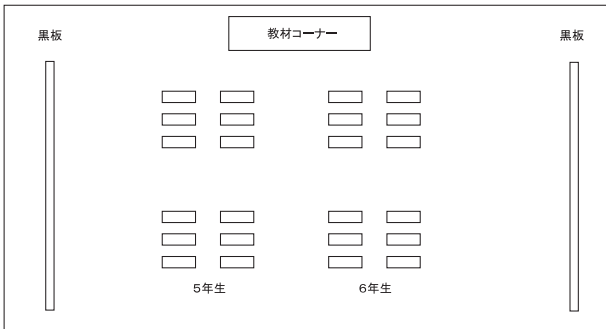
どのようなグループ分けをするかは、教室全体で1つの教材コーナーがあるのか、あるいは学年ごとの教材コーナーがあるのかによる。

図3 1年生と2年生のグループ分け



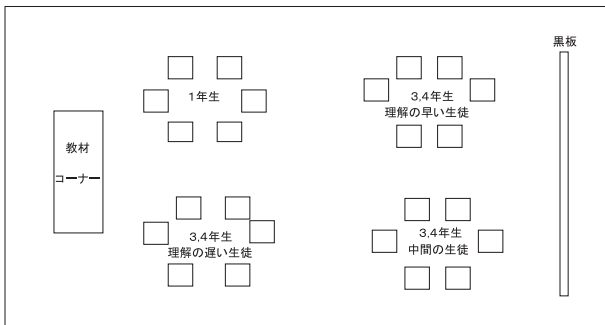
この教室の配置では、生徒たちは読み書き能力にもとづいてグループ分けされており、2つのグループが教師の指導を受ける間、他の2つのグループは、課題を与えられて自習する。

図4 5年生と6年生のグループ分け



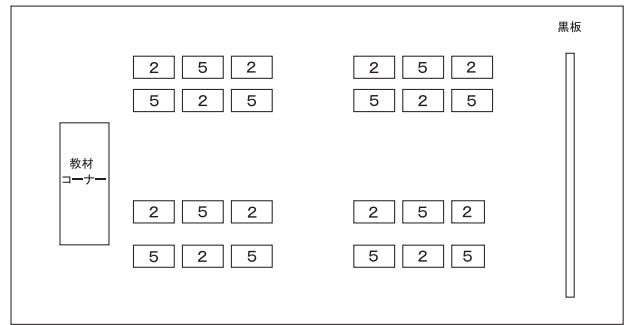
この配置では、すべてのグループが教材コーナーを使いやすい。教師は最も指導を必要としているグループで指導を行い、その間、他のグループは課題を与えられて自習する。

図5 1年生と3年生と4年生のグループ分け



この教室の配置では、学年を超えて、子どもたちの能力に応じたグループ分けが行われている。低位の子どもたちは、復習の指導を受けるために、同じグループに集められている。

図6 2年生と5年生のグループ分け



この教室の配置は、2つの学年の子どもたちが同じテーマと内容で学ぶという「科目によるグループ分け」である。この配置は、低学年の子どもが高学年の子どもに教えてもらえる点で有利である。5年生の生徒たちは、先生の助手として教えながら学ぶ。この方法は、子どもたち相互の敬意と自尊心を高める。

1. 教室の配置図を描きなさい。
2. その教室で活用される学習活動を説明しなさい
3. 最終的な配置図を描きなさい。

〈ノート〉

- 1 グループ分けの方法は教師による。
- 2 本書に提示された配置のパターンに厳密に従う必要はない。重要なことは、なぜその配置を選ぶのかという理由である。
- 3 必要なときはいつでも配置を変える。長時間にわたって同じ配置をとる場合もある。時々に応じた配置替えは学級を活発にし、教師も生徒も共に元気になる
- 4 どの配置を選んだ場合でも、その配置は、教師の日常業務を行いやすいものでなければならない。

4.4 結論

本章は、グループ分けと学級運営について説明し、効果的な学習のために、どのように学年や能力に応じて座席配置をすべきかということについて論じてきた。ここに書かれたアイデアは、よりよい学級運営のために役立つであろう。

- 1 下記の2つの学校における学級編成について、2つの可能な方法を示しなさい。

表12 各学年の生徒数

学校A		学校B	
学年	生徒数	学年	生徒数
1	53	1	110
2	26	2	50
3	30	3	25
4	41	4	25
5	25	5	15
6	20	6	15
7	31	7	13
計	226	計	253

- 2 複式学級における学習のプロセスで、生徒は有益な役割を果たすことができる。2つの重要な役割を述べなさい。
- 3 複式指導における究極の目的は何だと考えますか。
- 4 複式指導を成功させるための2つの手だてを説明しなさい。

5.0 指導計画 (Planning for teaching)

5.1 はじめに (Introduction)

指導計画は、なぜ重要なのか。

本書における指導計画とは、効果的な教授と学習を生み出すために書き上げられたすべてのものをさす。指導計画は、教育省のカリキュラムに基づく。こうしたことを念頭に置いて、本章では、教員養成プログラムで学んだように、学年組み合わせの基本的な考え方および書式、週ごとの計画、授業計画と時間割について述べる。ここで、単式学級で用いられるそれらの書式について考え、それらが複式学級では、どのようになるのかを考えてみると、興味深い。

5.2 到達目標 (Expected Outcomes)

本章の到達目標は次の通りである。

- ・学年をさまざまに組み合わせることができる。
- ・どのクラスにおいても、週ごとの指導計画を立てることができる。
- ・指導方法に対応した授業計画を準備することができる。
- ・どのクラスにおいても複式の時間割を準備することができる。

- ・適切で、しかも、生活に関連した教材を見つけ、あるいは作って活用することができる。

〈事例2〉

ルアプラ州の学校に新たに配属された教員資格を有している教師が学校に赴任して、42人の生徒に対し、無資格の教員が1人だけであることが分かった。2人ですべての学年を教えなければならない。そこでその教員は、現職教員研修を担当する郡教材センターコーディネーター (District Resource Center Coordinator) と郡教育官 (District Education Standard Officer) がいることを聞き、教員不足について相談することにした。

以下は、教師と DRCC とおよび DESO との会話である。

教師 : おはようございます。私はムツウェワンココ (Mutwewankoko) 小学校の教師です。

DESO : おはようございます。どういう用件でしょうか。

教師 : 私の学校では、7学年42人の生徒に対して、教師が2人しかいません。もっと教師が必要です。

DESO : 現時点では、これ以上の教師を配置することはできません。教育省が十分な教師を送ってこないのです。DRCCに行けば、もっと情報を得られるでしょう。

教師 : おはようございます。私の学校での教師不足について、DESOに相談したら、ここに来るように言われました。私の学校では、7学年42人の生徒に対して、教師が2人しかいないのです。

DRCC : 各学年には何人の生徒がいますか。

教師 : 1年生10人、2年生8人、3年生の7人、4年生5人、5年生5人、6年生4人、7年生3人です。

DRCC : そのような学年構成なら、1つの解決法として、複式学級を活用することができます。

教師 : 複式学級ですって! それはどのような指導方法なのですか。

DRCC : 1人の教師が、2つ以上の学年を同時に教える指導方法です。学級の人数によって学年を結合してクラスを編成するのです。

教師 : 私の学校で複式指導を行うためには、どうすればいいのですか。

DRCC : 必要な情報を提供します。複式学級の編成のしかた、週ごとの指導計画、授業案をどのように準備するかを指導します。

5.3 学期の指導計画 (Scheme of work)

複式の指導計画は、各学年の科目とトピックを、次表のように、横に並べて書く。横に並べて書くのは、オプションを示しているのではなく、教師が科目の内容を幅広く見渡すためである。

学期の指導計画を立てる時には、次のことを考慮しなければならぬ。

- ・ 国家の教育目標
- ・ 学校に固有の教育目標
- ・ 学校の施設
- ・ シラバス
- ・ 活用される指導方法
- ・ 学習者の年齢と能力
- ・ 授業で使うことのできる教材
- ・ 学級内の生徒がいくつの学年にまたがっているか、および生徒数
- ・ 使える授業時間数

複式学級と、これまでなじんできた単式学級との間の構造的な違いは何か。
その違いはどのような考え方から来ているのか。

月間指導計画表を使うことによって、指導計画に指導方法を含め、そして、例えばプロジェクト・ワーク、テーマ学習、横断的なテーマなど異なる学習方法を容易に結びつけることができる。このことは、到達目標を重視した新シラバスに対応している。

表13 算数の学期指導計画（1,2年生）

週	単元	1 年 生		2 年 生	
		トピック 1	シラバス	トピック	シラバス
1	1	集合—ものを分ける	1 頁	集合—5つまでのもののまとまりを正確に説明する	4 頁
2	2	集合—同じ仲間のものを見つける	1 頁	数字と記数—1000までを数えて書く	4 頁
3	3	集合—多い, 少ない, 同じ, 違う	1 頁	数字と記数—等号と不等号	4 頁
4	4	集合—図形の形と名称	1 頁	計測—ものの長さ	4 頁
5	5	集合—0-10の数字の集合	1 頁	計測—さまざまなものの大きさ, 長さの比較	4 頁
6	6	数字と記数—1-5を読み, 書く	2 頁	足し算と引き算	4 頁
7	7	順序と連続—1番目から5番目	2 頁	かけ算—足し算の繰り返し	4 頁
8	8	足し算と引き算—多いと少ない	2 頁	かけ算の表—2,3,4段のかけ算表	4 頁
9	9	買い物—100K までの買い物ごっこ	3 頁	買い物—1000K までの買い物ごっこ	5 頁
10	10	数字と記数—10ごとに100まで	3 頁	割り算—引き算の繰り返し, 1-100を2, 4, 5, 10で割る	5 頁
11	11	時間—1日のさまざまな時刻	3 頁	等式と不等式	5 頁
12	12	計測—大きさ, 長さ, 容積	3 頁	時間—時間を表す	5 頁
13	13	図形—形の認識	3 頁	図形—図形を描き, パタンをつくる	5 頁

表14 算数の月間指導計画（1,2年生）

週	単元	1年生のトピック	2年生のトピック	方 法	シラバスなど
1	1	集合—ものを分ける	集合—5つまでのもののまとまりを正確に説明する	地域環境の活用 テーマ学習 協力的学習 生徒同士の教え合い	シラバス1. 4頁 指導書 教科書 その他の教材
2	2	集合—同じ仲間のものを見つける	数字と記数—1000までを数えて書く	もの教材の活用 協力的学習	
3	3	集合—多い, 少ない, 同じ, 違う	数字と記数—等号と不等号	協力的学習（1年生） 個人学習（2年生）	
4	4	集合—図形の形と名称	計測—ものの長さ	もの教材の活用 生徒同士の教え合い 協力的学習	

5.4 週間指導計画 (Weekly forecast)

週間指導計画とは何か

週間指導計画とは、1週間に教えるべき内容を示すものである。それは、学期の指導計画に基づいているが、より詳しく記入したものである。週間指導計画の詳細は、学年ごとに縦に記入される点が、学期の指導計画と構造的に異なる。第1に、それぞれの学年の学期指導計画は横に並べて記入されるが、各学年の週間指導計画は縦に記入される。第2に、週間指導計画は、学期指導計画よりも詳細に書かれる。教師は学習者に期待される学習効果を把握していなければならない。

教師は学習者のニーズに対応して、教師が選んだ教授法および学習法をすべての学年で活用する。指導方法は、教科や指導内容に応じて活用される。これによって、教師がどのくらい長い時間グループや学習者個人に寄り添って指導するかが決まる。

1年生と2年生のザンビア語の時間には、生徒たちは同じ科目で同時に同じトピックを学習するのに対して、算数の時間には、学習者は学年によって異なる内容を学ぶ。算数では、科目のずらしが活用される。どの授業においても、教師はファシリテーターの役割を果たす。

表15 算数の週間指導計画 1週目(1,2年生)

教科	学年	課	テーマ	トピック	到達目標	教材	内容	指導方法	シラバスなど	コメント
算数	1年生	1	家庭	集合	大きさ、色、形、匂い、味でものを分けることができる 1つずつを正確に対応させることができる 分けられた各セットが多い、少ない、あるいは同じであることを述べる セットに分けられたものを基数の順に並べることができる 各セットのそれぞれのものに1-10の数字をつけることができる	物語 コップ スプーン 本 木の葉 定規 鉛筆 マッチ 箱	与えられた条件のもとでものを分ける ものを1つずつ対応させる 分けられたものが多い、少ない、あるいは同じであることを述べる セットに分けられたものを基数の順に並べる 各セットのそれぞれのものに0-10の数字をつける	もの教材の活用 協力的学習 仲間同士の教え合い	シラバス 1頁	
	2年生	1	家庭	計数	5までのものを正確に数えることができる	物語 木の棒 木の葉	各セットのものを1から5まで数える	もの教材の活用 協力的学習 仲間同士の教え合い	シラバス 4頁	

表16 その他の科目の週間計画 1週目(1,2年生)

教科	学年	課	テーマ	トピック	到達目標	教材	内容	指導方法	シラバスなど	コメント
ザンビア語	1,2年生	1-5	家庭	自分と家族	自分たちのことについて話し合うことができる 母音を読むことができる 家族について説明できる 自分と家族を描くことができる	黒板 チョーク 鉛筆 クレヨン アルファベット カード用紙	自分の名前、年齢、住所、生まれた場所、身体の部分の名称を言う 母音を読む 家族の構成を説明する 自分と家族を描く	物語づくり 書き方 協力的学習	シラバス 1頁	
総合理科	1,2年生	1-2	気候	気候	毎日の天気を記録、説明できる	黒板 天気表	毎日の天気を観察、記録する	観察 プロジェクト学習 協力的学習	シラバス 1頁	
社会/発達学習	1,2年生	1-2	家庭 友人	くらし 友人を助ける	自分の名前、年齢、住所、生まれた場所を言える 友人を助けるさまざまな方法を考える いじめられたらどんな気持ちになるかを説明できる	ノート 黒板 他の人を助けている人の写真	自分の名前、年齢、住所、生まれた場所 友人関係	質問と回答(Q&A) 討議 ロールプレイ	教科書 1頁 指導書 8-10頁	
芸術/技術	1,2年生	1-2	型づくり	粘土で型どる 運動する やってみよう	台所にあるものを型どることができる 身体を動かし、遊具を使う しっかり拍子をとって歌うことができる	粘土 台所用品 水 ロープ 棒	粘土で型どる 身体を動かす 歩く、走る、跳ぶ、傾く 個々人で歌う	テーマごとに発表 楽しみながら行う 協力的学習法	シラバス 1頁	

以上の表から、次の質問に答えなさい。

- 1 これらの書式にみられる構造的な違いは何ですか。
- 2 算数の週間指導計画をザンビア語の週間指導計画と比較しなさい。算数とザンビア語における指導方法の違いは何ですか。
- 3 なぜそれらの指導方法を使うのですか。

5.5 授業計画 (Lesson planning)

授業計画とは何か

授業計画とは、どの教材をどのように活用して教えるかを示すものである。

授業計画には、教師が教えようとする学習目標を明示する。複式の授業計画は、どの指導法を採用するかによって異なる。前述したポイントを考慮して、共通時間割の

オプション、科目をずらすオプションにおいて、同じ段階で、他の学年で、何が起きているかを考慮しなければならない。次の表の授業計画Aを参考にして、適切な指導法を選択することができる。

授業計画A (1年生と3年生)

- 1 教師が、ステップ1から4をどのように展開するかを説明しなさい。
- 2 複式学級で、直接指導していないグループに、どのように間接的に指導するか。
また1つの学年グループに、新しい概念を教えるときにどのように指導するか。

解決法

- 1 ステップ1では、3学年の生徒に、絵と名前を書かせる。それから1年生のグループに移動して新しい概念を教える。ステップ2では、1年生に練習問題をさ

表17 科目をずらすオプションの授業計画 (A)

学年	1年生	3年生
科目	算数	英語
時間	40分	40分
トピック	足し算 (計算式を縦に書く)	何からできているだろう
シラバスなど	指導書 1-36頁	指導書 1-16頁
教材	黒板, 棒, ビンのふた, ワークカード	黒板, 単語カード
到達目標	2桁の足し算ができる	<ol style="list-style-type: none"> 1 自分の名前を書くことができる 2 何からできているかを言うことができる 3 新たに習った単語を正確に読むことができる 4 練習問題の解答を書くことができる
指導法	もの教材の活用	質問と解答 (Q&A)

表18 Aの授業展開

	1年生	2年生
導入	「1たす1は2」「1たす2は3」の歌を両学年とも歌う	
1	教師が例題を与えて解き方を説明する (1) $5 + 2 = 7$ 5 (2) $11 + 12 = 23$ 11 $\begin{array}{r} 5 \\ + 2 \\ \hline 7 \end{array}$ $\begin{array}{r} 11 \\ + 12 \\ \hline 23 \end{array}$	自分の名前を書く
2	教師が板書した問題を生徒たちが解く $\begin{array}{r} 13 \\ + 11 \\ \hline \end{array}$ $\begin{array}{r} 13 \\ + 10 \\ \hline \end{array}$	何からできているかを言う
3	生徒は、グループリーダーが与えたワークカードから練習問題を書く $\begin{array}{r} 23 \\ + 12 \\ \hline \end{array}$ $\begin{array}{r} 17 \\ + 20 \\ \hline \end{array}$ $\begin{array}{r} 14 \\ + 21 \\ \hline \end{array}$ $\begin{array}{r} 36 \\ + 22 \\ \hline \end{array}$	教師と一緒に発音する
4	練習問題を解く 早くできた生徒は50-60の数字を書く	新たに習った単語を発音し練習問題を書く
まとめ	教師は机間巡視をしながら生徒を支援し、ノートに○をつけていく	練習問題の答を書き、教材コーナーを活用する
評価		

せ、3年生のグループに移動して「それらが何でできているか」を尋ねる。ステップ3では、1年生がカードを使って練習問題をしている間、教師は3年生のグループで、新しい単語を発音させる。ステップ4では、授業計画に書かれているように、1年生は練習問題を続け、3年生は新しい単語を読み、練習問題を書く。

2 例えばカードのように、生徒が自分たちで活用することのできる教材を開発する。テープやテレビなどの視聴覚教材を使うこともできる。早く理解できた生徒に、他の生徒を教えるように促す。

1つの学年に直接的に指導している間に、他の学年に間接的に指導するという事は、教師が絶えず1つの

学年につききりでなければならない、ということの意味しない。複式における最良の指導法は、学習者が、教師に求めなくても学ぶことができる授業を準備することである。これは本書で「自主的な学習(自学自習)」と呼んでいるものである。

授業計画においてどのオプションを選択するかは、直接的に指導するか、あるいは間接的に指導するかによる。2つまたはそれ以上の学年が、同じ作業をする科目別グループ分けオプションは、単式学級にもみられる。

5.6 時間割 (Time-tabling)

複式指導において、時間割はどのように作られるのか。時間割を考える前に、現在のカリキュラムが各学習領域

表19 複式の適切な授業計画 (B)

	2年生	3年生	4年生
科目	英語	算数	算数
トピック	見つけよう	引き算	足し算
教材	人形、棒、石など	ワークカード、もの	ワークカード、もの
シラバスなど	指導書40-42頁	教科書16-17頁	教科書20頁
到達目標	もののある位置を言える 過去について話せる	ものを動かして引き算ができる	ものを動かして足し算ができる
指導法	質問と解答 (Q&A)	もの教材の活用	もの教材の活用

表20 Bの授業展開

	2年生	3年生	4年生
導入	数を数えるゲームをする		
1	教科書30-31頁の物語を読む	ない番号を見つけ出す 35, 40, □, 50, □, 60, □, 70	教師が与えた問題を2人の生徒が黒板で解く 例 2346 +1657
2	物語を読み続ける	教師が引き算の問題を与え、生徒が黒板で解く	ワークカードから練習問題をノートに書いて解く
3	生徒はペアで会話1と2を行う	練習問題を続ける	練習問題を続ける
まとめ	生徒は新たに学んだ文字をノートに書く	教師は机間巡視をしながら生徒を支援し、ノートに○をつけていく	
評価			

表21 時間割の例 (1, 2年生)

	学年	1限	2限	3限	休み時間	4限	5限	6限
月曜	1	ザンビア語	リテラシー				算数	社会
	2	ザンビア語	リテラシー			算数	社会	芸術/技術
火曜	1	英語会話	リテラシー			算数	算数	算数
	2	算数	リテラシー			英語	リテラシー	リテラシー
水曜	1	社会	リテラシー			ザンビア語	算数	総合理科
	2	社会	リテラシー			算数	ザンビア語	総合理科
木曜	1	算数	リテラシー			総合理科	英語会話	コミュニティ
	2	英語会話	リテラシー			総合理科	算数	スタディズ
金曜	1	ザンビア語	リテラシー			総合的学習		
	2	英語会話	リテラシー			総合的学習		

に、どれだけの時間を配分しているかを把握する必要がある。(時間割にかかわらず、学習者の能力を高めるために、異なるオプションをフレキシブルに使ってもよい。)学級内の学年の数が多いほど、時間割はより複雑になる。次の3つの時間割を見て、質問に答えなさい。

- 1 月曜日の1時間目と4時間目では、どのオプションが使われていますか。
- 2 火曜日の2時間目と3時間目の授業方法の違いを簡潔に説明しなさい、
- 3 「科目別グループ分けオプション」の学期指導計画を準備する2つの方法を述べなさい。
- 4 火曜日の1時間目と2時間目にはどのような方法を用いますか。それはなぜですか。

解答例

- 1 月曜日の1時間目は共通時間割オプション、4時間目は教科ずらしオプションが使われている。
- 2 2つの学年から4つのグループが編成されている。
 - ・2つのグループは、直接的指導を受ける。
 - ・他の2つのグループは、自学自習をする。
- 3 まず高学年の指導計画を準備して、両学年の指導計画を立てる。
次に、テーマ学習を展開するために、両学年の内容を比較して、共通のテーマを選ぶ。

5年生、6年生、7年生の複式の場合も、2学年からなる複式学級の時間割を編成する時と同じである。

- 1 月曜日の1時間目には、どのオプションを活用し

- ますか。
- 2 5-7年生が、同じレベルで、同じ科目を学ぶのは、何時間ですか。
- 3 火曜日の3時間目は、どのようなオプションを選択しますか。

解答例

- 1 共通の時間割
- 2 26時間
- 3 まず、すべてのグループを同時に教える。1つのグループに直接的に指導している間、他のグループの生徒たちは、自学自習をする。

これらは単なる時間割の例である。各自が勤務する学校の実情に合わせて時間割を準備しなさい。

5.7 複式指導における教材 (Teaching/learning resources in multigrade teaching)

教材とは何か

複式学級で使われる教材は、生徒たちに自学自習を促すことが重要である、という点を除いては、単式学級の教材と同じである。複式学級では、生徒たちが自分で使える教材が、いっそう必要である。

本章では、学びと指導を手助けする教材について取り扱う。教材とは、図であったり、教科書であったり、あるいは石、ビン、人、建築物の構造、地域の環境であったりする。

市販の教材ですべてをまかなうことは、不可能であることに気づくであろう。したがって、教材の多くの部分を地域の環境から得なければならない。

a) 指導/学習教材とは何か

表22 時間割の例 (5, 6, 7年生)

	学年	1限	2限	3限	4限		5限	6限	7限	8限
月曜	5	算数	ザンビア語	リテラシー		休 み 時 間	社会	社会	英語	理科
	6	算数	ザンビア語	リテラシー			社会	社会	算数	理科
	7	算数	ザンビア語	リテラシー			社会	社会	算数	理科
火曜	5	理科		英語			ザンビア語	芸術/技術		社会
	6	理科		算数			ザンビア語	芸術/技術		社会
	7	理科		英語			ザンビア語	芸術/技術		社会
水曜	5	算数	リテラシー	社会			英語	ザンビア語	算数	芸技
	6	英語	リテラシー	社会			算数	ザンビア語	英語	芸技
	7	英語	リテラシー	社会			算数	ザンビア語	英語	芸技
木曜	5	社会	英語	芸術/技術			算数	英語	ザンビア語	理科
	6	社会	英語	芸術/技術		算数	算数	ザンビア語	理科	
	7	社会	英語	芸術/技術		英語	算数	ザンビア語	理科	
金曜	5	算数	理科		リテラシー	芸術・技術	総合学習			
	6	算数	理科		リテラシー	芸術・技術	総合学習			
	7	算数	理科		リテラシー	芸術・技術	総合学習			

- b) 指導教材とは何か
- c) 学習教材とは何か
- a) 指導/学習教材とは、指導/学習のプロセスを手助けするさまざまな教材を指す。指導教材と学習教材の2種類を含む。
- b) 指導教材とは、子どもの学びを手助けするために、教師が用いる教材である。指導教材はまた、知識を具体的に説明する時に有効である。例えば、壁に張り出された牛の絵、フラッシュカードに書かれた足し算の問題、英語を話す操り人形などが含まれる。
- c) 学習教材とは、学びを手助けするために子どもが自分たちで使う教材である。学習教材は、子どもが積極的かつ効果的に学ぶことを手助けする。学習教材は、子どもたちが他の子どもたちと一緒に自ら学べるように手助けする。例えば、ビーズ、石、植物の種、ゲーム、歌、ワークシートなどが含まれる。

〈複式指導において指導/学習教材を活用する重要性〉

中国の次の諺について考えなさい。
 聞いたことは忘れる。見たことは覚えている。
 したことは理解できる。

この諺の意味するところを、自分の言葉で説明しなさい。自らの指導の経験から、具体的な例を説明しなさい。

この諺はいくつもの意味を持っている。3人の教師が1学年で英語を教えるとき、「メイズ」という言葉を次のように教えた。

教師A：メイズと発音し、それから、メイズとは何かを地域の言語で説明した。

教師B：メイズと発音し、それから、メイズとは何かを地域の言語で説明し、そして、黒板にメイズと書いた。

教師C：メイズの穂を教室に持ち込み、それを子どもたちに渡しながら、メイズと発音した。そして子どもたちはメイズを噛んでから、メイズと発音した。

どの教師が最も適切な方法を用いているか。

子どもたちに聞かせ、見せて、噛ませた教師Cである。噛むという行為によって、よりよく理解することができる。

指導/学習教材の例

複式学級で使うことのできる指導/学習教材に注目してみよう。

〈黒板〉

黒板は複式学級で最もよく活用される教材であるが、ときに間違っ使用されたり、十分に活用されない場合がある。教師を別とすれば、黒板は教室でもっとも目に見えるものである。

黒板は、教室のすべての子どもたちがよく見える場所に置かなければならない。その教室に存在する学年の数に応じて、黒板を分けて使うか、またはそれぞれの学年に黒板が配置されなければならない。

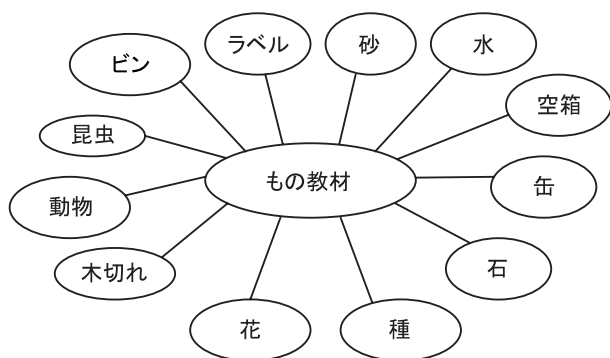
表23 時間割の例 (1, 2, 3, 4年生)

	学年	1 限	2 限	3 限		4 限	5 限	6 限
月曜	1	社会	リテラシー		休 み 時 間	ザンビア語	算数	芸術/技術
	2	社会	リテラシー			ザンビア語	算数	芸術/技術
	3	英語	ザンビア語	社会		リテラシー		芸術/技術
	4	算数	ザンビア語	社会		リテラシー		芸術/技術
火曜	1	英語会話	リテラシー			算数	理科	芸術/技術
	2	英語会話	リテラシー			算数	理科	芸術/技術
	3	ザンビア語	理科	算数		リテラシー		芸術/技術
	4	英語	理科	算数		リテラシー		芸術/技術
水曜	1	社会	算数	ザンビア語		リテラシー		ザンビア語
	2	社会	算数	ザンビア語		リテラシー		ザンビア語
	3	社会	算数	ザンビア語		リテラシー		ザンビア語
	4	ザンビア語	リテラシー			算数	英語	ザンビア語
木曜	1	英語会話	リテラシー			算数	理科	芸術/技術
	2	英語会話	リテラシー			算数	理科	芸術/技術
	3	算数	社会	理科		リテラシー		芸術/技術
	4	算数	社会	理科		リテラシー		芸術/技術
金曜	1	算数	リテラシー		総合的学習 総合的学習 総合的学習 総合的学習			
	2	算数	リテラシー					
	3	算数	リテラシー					
	4	リテラシー	英語					

〈もの教材〉

もの教材とは、周りの環境から教室に持ち込まれた現物である。例えば、次の図のようなもの教材が考えられる。

図7 もの教材



〈メディア〉

メディアとは、あらゆるコミュニケーションの方法を含む。話すことも、英語も、書くことも、テレビもメディアである。授業で、メディアを活用する時には指導のメディア（媒体）と呼ばれる。教師が何かを教えようとするとき、活用することのできるメディアはたくさんある。複式学級を指導する教師として、地域の環境や学級の状態に適したメディアを活用するのが望ましい。

〈教材学習コーナー〉

複式学級では、子どもたちが、必要とするときにいつでもアクセスできるように、教材コーナーを設置する。教材コーナーにはさまざまな教材や、具体的なものから抽象的なものへと幅広い活動ができる教材を置く。子どもたちの学びをしっかりとものにし、応用するために教材を活用する。学習コーナーは、子どもたちが実際に現物を手にとって、他の子どもたちと関わり合い、協力し、参加する機会を提供する。

〈フラッシュカード〉

フラッシュカードとは、小さいカードに、言葉や絵が書かれた教材である。教師はフラッシュカードを授業の中で教えたり、概念を理解しやすくするために活用することができる。フラッシュカードはまた、壁に貼って役立てることもできる。

〈ワークカード〉

複式学級では、子どもたちが自学自習をできるワークカードのような教材があると、役に立つ。ワークカードは個人あるいはグループで使い、理解するのに難しい概念を、子どもたちが理解しやすくしたり、学びを定着させるために使われる。

〈ジオボード〉

これは、幾何の図形を教えるための数学的な道具である。幾何学的なあらゆる種類の形を作るために、ゴムバンドを使うことができる。幾何の図形には、2つのカテゴリがある。教師がデモンストレーションに使う大きな図形と、個々の子どもたちの持つ小さな図形である。教師が大きなジオボードで作った形と見比べながら、子どもたちも図形を作ることができる。

〈電気ボード〉

これはどの科目でも使うことのできる自学自習のための教材である。子どもたちは、ボード上の主要な情報とは別に、単純な周辺の知識についても学ぶ。質問と答えをボードの上で結びつけ、答えが正しいときにだけ電球がつく。

〈リソースパーソン〉

情報化時代の今日、教師がすべてのことを知り尽くしているという事はあり得ない。情報が非常にスピードで生み出されつつあり、従って、すべての情報を知る能力よりも、情報にアクセスする能力の方が重要である。複式学級の教師は、それぞれの分野での専門家をリソースパーソンとして活用することができる。こうした人々は、授業で役立つ専門的な知識やスキルを有している。リソースパーソンは複式学級、および学校行事においても有効である。

リソースパーソンの例—警察官、村長、看護師、市議員、仕立屋、漁師、鍛冶屋、レンガ職人、猟師、保護者、生徒、お年寄り、コミュニティリーダー、コミュニティーの他のメンバー

もちろん、そのときどきのテーマによって、招くリソースパーソンは異なってくる。

〈モデル〉

モデルとは、実際の物体よりも小さな模造品である。実物同様に、モデルは幅や長さ、深さもち、すべての角度から見る事ができる。

〈コンピューター〉

コンピューターを指導教材として活用することができる。

〈教材の管理〉

教材にはどのような種類があり、どのように教材を作るのかを知ることは重要であるが、同時に、それらの教材を適切に管理することも重要である。教材は注意深く管理されなければならない。

次の点に留意して、教室の教材を管理することが必要である。すべての教室には、教材を安全に保管するための設備がなければならない。扉付きの棚やロッカーがあれば、校長室は理想的な保管室になりうる。子どもたちは、教材用に並べたり、保管場所に運ぶのを手伝うことができる。

〈保管簿〉

すべての教室には、教材や教具を保管するための適切で安全な設備がなければならない。教師は絶えず教材を保管し、補充しなければならない。そのためには、保管簿を活用することが重要である。

〈整備〉

教材を整備するための場所が必要である。地域の教材センターがその役割を果たすであろう。

〈記録〉

教材をチェックするために、貸出記録簿が必要である。子どもたちも貸出記録を手伝うことができるであろう。

5.8 結論

複式指導においては、授業計画および週毎の時間割作成が重要な課題である。教師は絶えず慎重でなければならない。

複式学級における指導／学習教材を活用する重要性は、強調してもし過ぎることはない。教材を活用する目的は、学びの効果を最大化することである。複式学級においては、学習者の自学自習を促進しなければならない。

- 1 いくつかのオプションを使って、複式の授業計画を作りなさい。そして、同僚と相互に学び合いなさい。
- 2 これまで授業で活用したことのあるもの教材を一覧にしなさい。同僚の一覧表と比較しなさい。あなたが使ったことのない教材を、同僚は使っていましたか。
- 3 もの教材は最良の教材だと思いますか。それはなぜですか。
- 4 数学と社会科で、子どもたちが使える自学自習の教材を2つ説明しなさい。
- 5 先述のゲストにあげられている以外のリソースパーソンをあげなさい
- 6 複式学級で子どもたちが、どのように相互に教えあうことができるかを話し合いなさい。